

非文字資料研究センター News Letter

The Research Center for Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

2015年度 非文字資料研究センター 第1回公開研究会

『国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」』の開催報告……………孫安石 2

2015年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会

『台湾でなぜ神社の復興が見られるのか？』……………中島三千男 4

中国・南京神社の社殿はなぜ壊されなかったのか？……………大里浩秋、孫安石、内田青蔵 14

研究会報告

絵引研究のインパクト……………富澤達三 6

研究調査報告

中国・台湾・サイパン・シンガポールの神社跡地報告……………稲宮康人 8

九江・沙市・漢口の旧租界地を回っての報告……………大里浩秋、孫安石、内田青蔵 14

研究エッセイ

パターンランゲージ試論……………森住哲也 21

連載 戦時下メディア研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語 「用語編」その4……………原田 広 24

招聘研究者レポート

もし川が枯れてしまったら、魚は棲息し続けられるのか？
—中日の伝統的な地方曲芸における生き残りの窮状について—

……………蘭 暁敏 33

日本の文化、現代美術、マンガ探究……………Simonia Fukue Nakagawa 34

民俗と生活

—日本訪問時の見聞と感想—……………鄧 苗 35

日本における「筆談」に関する調査……………謝 咏 37

日本における初期の口演童話についての研究報告

……………Marine PENICAUD 38

派遣研究者レポート

華東師範大学中国非物質文化遺産保護研究中心での訪問研究……………王子成 40

バンクーバーにおける収蔵資料等の保存・修復について……………平田茉莉子 41

フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター訪問後記……………王鶴 43

■2016年度センター研究員・研究協力者・研究テーマ・奨励研究員……………45

■非文字資料研究センターの移転について……………46

■主な研究活動……………47

■『非文字資料研究』への寄稿について……………48

2015年度
非文字資料研究センター・日本常民文化研究所・台湾大学文學院歴史学部 共催
第1回公開研究会

国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」の開催報告

日 時：2015年12月11日（金）10:00～16:00 12日（土）10:00～13:00

会 場：台湾大学文學院文20教室

報告者：常民研—高城玲、非文字—安田常雄、田島奈都子、金容範、金子展也

コメンテーター：内田青蔵（基調発言）、栗原純、大里浩秋、中島三千男、孫安石

報告者：呂紹理、蔡錦堂、許雅恵、王桜芬

コメンテーター：楊肅獻（基調発言）、周婉窈、陳翠蓮、李文良、陳慧宏、山内登文、顔杏如

孫安石（非文字資料研究センター 研究員）

2015年12月11日～12日、台湾大学文學院歴史学部と共催して国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」を開いた。そこでの報告やコメントの詳細な内容については、2016年に別冊の報告集を制作することにしているの、ここでは、台湾側の4名の報告を取り上げ、その内容の一部を紹介することにしたい（全体のプログラムについては次ページの【表1】を参照のこと）。

台湾大学歴史学部の呂紹理教授の「帝国日本と台湾の農業広告」は、19世紀後半からアジア地域に出現した「害虫」という概念がどのような経路で植民地台湾に伝播されたのか、を紹介するものであった。それによれば、1920年代を前後した時期に日本の化学工業は飛躍的な発展を遂げ、農業が本格的に農家に導入されるようになった、という。呂教授は、この台湾における農業の伝播を裏付ける手掛かりを素木得一『台湾害虫駆除予防講習講義録』（1908年）と三輪勇四郎『農業用殺虫剤要覧』（1939年）を比較検討することに求めている。また、そのほかに『台湾日々新報』と『台湾農事報』の害虫に関連する新聞記事の分析は勿論、当時の日本の農業製造会社を代表する会社であった「三共株式会社」の雑誌『三共新農業』などの分析によって、1930年代、40年代の台湾における農業が導入される詳細が明らかになる、と述べられた。

ところが、『台湾日々新報』の最も大きな広告主であった三共株式会社や「キンチョウ蚊取り線香」の製品で有名な「大日本除虫菊会社」はいずれも同新聞に農業に関連する広告を積極的に掲載しておらず、その背景にはどのような理由があったのか、今後の課題であると指摘した。

台湾大学音楽学研究所に所属する王桜芬教授の「史料としての歴史録音—張福興勝利唱片の作品を例に」は、1930年



写真1 「シンポジウム会場」

代という植民地時代に台湾音楽の振興に尽力した音楽家の張福興が残したビクターレコードの作品を素材に、音楽または、音声資料をいかに歴史資料としてとらえることができるのか、を論じるものであった。王教授の紹介によれば、張福興は東京音楽学校を卒業した後、台湾に帰国して西洋音楽の受容と発展に大きな役割を果たし、台湾の「新音楽の父」として評価される人物である、という。彼は1930年代に台湾固有の音楽を保存し記録する作業に関わったほか、台湾独自の音楽を作ることを目指し、ビクターの台湾支部文芸部長として合計11曲のレコードを発行したが、その結果生まれたものは、「西洋」風味を加味した台湾音楽の再生産、という皮肉なものであった。

張福興は台湾音楽の振興を志す一方で、台湾音楽を軽蔑するという矛盾した心理状態に悩んだが、これは音楽に限らず、帝国日本と植民地にまたがった知識人が常に直面した問題でもあった。そして、彼の事例は、戦後70年という時間を経て現代社会を生きる我々にも共通する、アメリカや日本との関係、台湾というアイデンティティに悩む姿を映し出しているとも指摘した。

歴史学部所属の許雅恵副教授の報告「古鼎イメージの近代的転化：日中戦争（1937-1945）の中の大鼎」は、1937年12月の日本軍の南京占領後、日本軍兵士を慰



写真2 「非文字資料研究センターの資料展示」

霊する目的で铸造された「大鼎」を取り上げ、慰霊というシンボルがどのように変容していったのかを検討するものであった。元々南京の戦いで亡くなった日本軍兵士を慰霊するために作られた「大鼎」は、後に靖国神社に奉納されたが、戦後には再び国民政府によって接収され、台湾に運び込まれた。そして、幾多の紆余曲折を経ながら、現在の台北の故宮博物院に安置されるに至り、「大鼎」に彫られた五弁桜は梅花の紋様に替えられ、制作の由来を記した銘文は、「博愛」という孫文の字に替えられた。古代中国で皇帝の権威を象徴する祭事の供物として制作されたとされる「鼎」は、古代と現代、南京と東京、台北という時空を超えて、新たなイメージを我々に提示しているのではないかと述べた。

台湾師範大学台湾史研究所の蔡錦堂教授の「戦後における台湾の神社の処分と研究」は、植民地時代に台湾で建立された数百を数える神社（官幣社、国幣社、県社、無格社のほか、各種の企業や学校に建立された構内神社を含む）の研究が、1980年代以降どのように行われてきたのかを、①修士・博士論文、②専門の論文集、③台湾総督府関連文書の翻訳と編纂作業、④各種機関の委託による神社の調査報告書の発行、という分野から検討を加えた上、戦後初期の行政長官公署と台湾省政府の公文書の中に、日本の神社を接収する過程を記した重要な内

容が含まれていることを紹介するものであった。そのうち後者については、戦後初期の1946年2月に台湾省行政長官公署の教育処は台湾神宮、台湾護国神社、建功神社の三か所をそれぞれ省立社教巡回施教団、省立台北民衆教育館、民衆学校として利用する計画であったこと、また、台湾護国神社は台湾省忠烈祠に、台湾県神社は中山公園に変更することを指示する具体的な規定も確認できるとした。蔡教授によれば、1980年代の半ばから始まった台湾の本土化運動により、旧来はもっぱら「侵略」の象徴であることを意味した神社に関連する文物が、いまは歴史的な建築や文化遺産として再評価されることになり、神社にかけられた「侵略国恥」や「皇民化」といった汚名をぬぐい、歴史遺産として再生するチャンスが与えられるようになったとのことである。

以上、台湾側の報告を四つ取り上げ、その内容の一部を紹介したが、報告者4名のほかに、台湾大学歴史学部所属する周婉窈教授、陳翠蓮教授、顔杏如教授、李文良教授、陳慧宏教授、人類学部の童元教授、音楽学研究所の山内登文教授がコメンテーターとして登場して、日本側の報告に対して刺激に富む活発な意見を提示してくれたことを付け加えておきたい。



写真3 「シンポジウム会場」

【表1】「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」のプログラム

12月11日 セッション1「帝国日本と非文字資料」(司会：孫安石)

- (1)「台湾『パイワン族の探訪記録』(1937)の現地上映会—現代に生きるアチックフィルム・写真」(高城玲-神奈川大学教授・日本常民文化研究所所員)
- (2)「戦時中の紙芝居と宣伝—日本と台湾の場合」(安田常雄-神奈川大学特任教授・非文字資料研究センター研究員)
- (3)「戦前期日本のヴィジュアル・デザインにおける台湾イメージ」(田島奈都子-東京都青梅市立美術館学芸員・神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)
- (4)「帝国日本と台湾の農業広告」(呂紹理-台湾大学歴史学部教授)
- (5)「史料としての歴史録音：張福興勝利唱片の作品を例に」(王桜芬-台湾大学音楽学研究所教授)
- (6)「古鼎イメージの近代的転化：日中戦争(1937-1945)の中の大鼎」(許雅惠-台湾大学歴史学部副教授)

12月12日 セッション2「帝国日本と台湾のイメージ」(司会：呂紹理)

- (1)「韓半島における日本人居留地と住居建築」(金容範-神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員)
- (2)「メガ産業と企業神社—台湾における神社創立を全体としてとらえるために」(金子展也-神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)
- (3)「戦後における台湾の神社の処分と研究」(蔡錦堂-台湾師範大学台湾史研究所教授)

2015 年度
非文字資料研究センター
第 2 回公開研究会

「台湾でなぜ神社の復興が見られるのか？
中国・南京神社の社殿はなぜ壊されなかったのか？」

日 時：2016 年 2 月 27 日（土）13:00～17:30

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308 会議室

開会挨拶：田上 繁（神奈川大学日本常民研究所所長）

趣旨説明：中島三千男（神奈川大学非文字資料センター客員研究員）

総合司会：津田良樹（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

講 演：武知正晃（台湾首府大学）

「台湾における日本時代の建築物を見る眼差しー近年なぜ神社の復興が目立つのか」

李 百浩（中国・東南大学建築学院）

「日本の敗戦後における旧南京神社の歩みーなぜ南京で社殿が壊されなかったのか」

コメンテーター：

蔡 錦堂（国立台湾師範大学）

上水流久彦（県立広島大学）

開催の趣旨

神奈川大学非文字資料研究センター主催の 2015 年度第 2 回公開研究会（海外神社班担当）が、2016 年 2 月 27 日（土）13 時から 17 時 30 分まで、神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308 会議室で行われ、90 名近くの出席者が会場を埋めた。

本研究会の開催の趣旨は以下のようなものである。

近年、海外神社が建てられた地域で神社の再建、復興、活用（跡地を含めて）が目立つようになりました。この流れは、早くは 1980 年代に旧南洋群島（現パラオ共和国、北マリアナ諸島連邦等）に建てられた神社（サイパンの彩帆香取神社、パラオの南洋神社など）に始まりますが、最近では旧樺太（現ロシアサハリン、トマリオルの泊居神社等）、台湾（屏東県高士村のクスクス社等）においても目立つようになっております。

海外神社（跡地）の研究は、戦前の海外神社そのものの研究にとって役に立つものですが、それとともに、その国、地域の戦後の歩み、そして現在の姿を浮き彫りにするものであることは、我々の研究で明らかになってきたことです。

今回の公開研究会開催の趣旨は、

- ①今日における台湾での神社再建、復興、活用の動きは、今日の台湾のどのような事情を背景にしたものであるかを読み解きたいということです。併せて、それは旧南洋群島や旧樺太のそれとどのような共通点、違いがあるのかを明らかにすること。



公開研究会の様子

- ②他方、中国では東北部（旧満州地域）を除いて、神社の遺構が残っているのは我々の調査の範囲では非常に少ない状況です（旧新京、現長春の建国忠霊廟、旧関東州、現旅順の関東神宮など）。そうした中で、南京神社の場合、その遺構（本殿、拝殿、社務所）がほぼそのまま残り、文化財として登録されるとともに、現在では民間会社などに利用されております。中国では、戦後すぐの破壊や自然崩壊、さらには残った物も文化大革命期に壊されたものも多いといわれています。こうした中で、また、とりわけ「南京大屠殺記念館」があり、また昨年 12 月にはその分館として中国で初の「慰安婦記念館」が建てられた南京で、どのような経過、論争を経て旧南京神社の社殿は壊されずに残って、今日にいたっているのか。このことを明らかにすることでした。

以上のような問題意識の下に、歴史学、建築学、文化人類学の立場から総合的に読み解いていこうというものであった。

今回の報告、コメントは『非文字資料研究』13号に全文収録されるので、ここでは各報告者のレジュメにそって主な章立てだけ報告しておく。

講演

武知正晃氏

はじめに／本報告にあたっての視点／日本統治時代への意識／現代台湾での日本式建築・神社へのイメージ／ネット上の郷土探し・神社参拝／神社再建をめぐる言説／近年の神社の復元と言う現状について／おわりに



武知正晃氏

李 百浩氏

前言／南京神社計画以前／計画及び建設時期／戦後・中華民国時期／中華人民共和国時期／現在（現状実測図、南京神社境内の復元）／結語



李 百浩氏

コメント (2講演に対するコメントをいただいた上、独自の追加報告をいただいた)

蔡 錦堂氏「戦後台湾における神社処分について」

神社の接取と処分（戦後初期 1945年～1960年）／戦後の新聞記事から見た神社に対する処分

(文責：中島三千男)



蔡 錦堂氏

上水流久彦氏

複数地域で建築物を研究する意義／台湾における建築物の現在／植民地期の分析枠組み



上水流久彦氏

最後に討論が行われたが、主に昨年（2015年）、台湾南部屏東県高士村に地元民の要望を受けた日本人神職（佐藤健一氏）によって再建されたクスクス社の評価をめぐるものであった。



津田良樹氏（総司会者）と中島三千男氏（趣旨説明者）



絵引研究のインパクト

富澤 達三 (非文字資料研究センター 研究員)

1、『絵巻物による日本常民生活絵引』の発刊

洪沢敬三による絵引研究書『絵巻物による日本常民生活絵引』5巻本(+総索引)は、角川書店から出された『日本絵巻物全集』全25巻の付録本として世に出た。当初は薄い表紙で無線綴じの、「あくまで付録」という簡易な造りであったが、好評であったようで、第3巻目から独立して販売される⁽¹⁾。装丁の差は歴然で、販売本は丈夫なクロス綴じで厚紙の表紙・函入りであった(図1)。

1984年になり、平凡社から『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『新版 常民生活絵引』)が、全5巻+総索引1巻で出版された。角川版と同じB5判クロス綴じで、別冊の総索引には、河岡武春氏と西和夫氏のエッセイ、網野善彦氏の論考⁽²⁾が掲載された。新版では、不鮮明な画像が入れ替えられ、明らかな誤記は改められている⁽³⁾。



図1 角川版『絵巻物にみる日本常民生活絵引』3巻の、付録本と販売本の比較

2、絵引のインパクト

絵画史料による歴史研究に、日本史でいち早く着目したのは中世史分野で、『新版 常民生活絵引』は、その動きに少なからぬ影響を与えた。なかでも黒田日出男氏は、荘園絵図・絵巻物・肖像画などの絵画史料の分析を行い、パノフスキーらの理論を取り入れて絵画を読み解き、次々と著作を発表していった。黒田氏は、「日本読書新聞」第2286号で『新版 常民生活絵引』に注目し、文化人類学者の小松和彦氏と、対談「中世民衆像の図像学—新版『絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社)の刊行を機に—」を行っている(図2)⁽⁴⁾。

この対談で黒田・小松の両氏は、①絵引の常民生活以外への拡大、それを実現する学際研究体制の構築/②文献

の補助としてではなく「絵そのもの」を読み解く研究の推進/③貴重な絵巻のカラー図版集の発刊と、研究者への情報提供の充実/④諸本がある絵画史料の比較研究の必要、などの意見を交換している。

ところで、日本国内における歴史学の毎年の研究動向を知るには、史学会による『史学雑誌』の特集、「回顧と展望」が大変便利である。

「回顧と展望」でも、『新版 常民生活絵引』に関する記述がある。1985年の「回顧と展望」を読むと、前年1984年の歴史学会全般は、アナル学派の影響下で、いわゆる「社会史」ブームが起こっていたことが知られる。同号の日本中世史分野の執筆担当者は石井進氏で、網野善彦氏の非農業民に関わる活発な研究の数々を評価している。さらに石井氏は、民俗学や歴史学との協業(=境界領域研究)で、中世民衆の心性が探られるなど、「社会史」的な意欲的研究が続出し、日本中世史が盛り上がった状況を指摘した。そのなかに『新版 常民生活絵引』に言及した、以下の一文がある。

文献史料が乏しいだけにこうした境界領域の研究には絵画史料が重要となるが、「絵引」として重宝されていた洪沢敬三『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の、神奈川大学日本常民文化研究所による訂正を加えた新版(平凡社)の刊行は、まさに慶事である。(『史学雑誌』第94編第5号、65頁)

1980年代中期、絵引研究は再評価され、絵画史料を一次資料とする日本史の研究が、中世史分野から行われたのであった。



図2 対談「中世民衆像の図像学」(黒田日出男/小松和彦)

3、神奈川大学での絵引研究継承

かつて村田泥牛氏は、渋沢敬三の依頼で中世絵巻物に描かれた常民生活の場面をモノクロ画像で丹念に模写し、ときに一部を省略して「抜き描き」を行い、それらが検討され絵引研究として世に出された。現在では、オリジナルの図像資料をプロのカメラマンが撮影した、ブローニー判や4×5判の大型カラーポジフィルムからパソコンに読み込んで、超高精細のデジタルデータを作成し、検討用画像を作ることができる。例えば江戸幕府が編纂した巨大な国絵図、国宝級の貴重な絵巻や、屏風絵のように細かく描かれた作品であっても、デジタル画像なら細部まで拡大し、分析することができる。デジタル画像は複製も容易であり、技術的には絵引研究は進めやすくなった。

2003年に神奈川大学「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が、文部科学省21世紀COEプログラムとして採択され、「非文字資料」研究のひとつの柱として、渋沢敬三の絵引研究を受け継ぐ試みが開始された。素材は18世紀以降の図像資料で、名所図会・農耕図・朝鮮中国の風俗画などで、絵引作業が行われた。第1期成果として、①東海道編(2007年)／②北海道編(2007年)／③北陸編(2008年)／④中国港南編(2008年)／⑤朝鮮風俗画編(2008年)が出され、研究機関に配布された。

第2期として『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』(2014年3月)、『18世紀ヨーロッパ生活絵引 都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋』(2015年3月)が出され、第3期も継続中である。渋沢らの絵引研究の素材が中世の著名な絵巻物であったが、有名・無名のさまざまな図像資料が選ばれている。歴史研究での「描かれた資料」の活用を進めるべく、バラエティーに富んだ図像資料が使用されるべきであろう。

おわりに

五来重氏は、角川書店の『日本絵巻物全集』の第10巻「一遍聖絵」の解説を書いたことが縁で、京都で角川源義社長と渋沢敬三に会うこととなった。このとき渋沢は五来氏に「絵巻物の各シーンに見られる民俗を字引(辞書)でなく「絵引」にしたい」と、絵引の構想を語ったという。これが角川版の『常民生活絵引』で、五来氏は同書に対して以下の感想を述べている⁽⁵⁾。

渋沢さんは率直に言って、衣食住・生産・交通交易に重点をおいて、年中行事や信仰・祭・仏事・通過儀礼・芸能などの精神生活の面には、あまり興味を示さなかったようであった。そうはいって

も「絵引」という発想はさすがで、絵巻物の効用は絵によって語られる具体性にある。

絵は、ことばによって説明されるが、文章を極力減らし、「絵そのもの」で中世の常民生活を具体的に見せた渋沢のオリジナリティーを、五来氏は評価している。

また、前出の黒田日出男氏も『新版 常民生活絵引』に関し、以下の指摘をしている⁽⁶⁾。

ただこの『絵引』は、絵に描かれている事物の名前を明らかにすることに力点が置かれたために、描かれている場面が何を表現しているかについては言及がはなはだ少ないことなどの問題がある。だがそれは、絵画史資料に関心を持つ多様なジャンルの人々の共同作業によって、次の『絵引』が作られればよいのではないか。

近世日本社会は膨大な文字資料を残したが、専門の絵師や文人・絵心のある素人による肉筆画、複製された摺物・版本挿絵などの図像資料も膨大である。近世の図像で使われた絵画的技法は、対象を遠景からの視点で描いた景観や町並み中心の絵から、人物の顔が描き分けられ年齢・身分・職業までが明確に判別できる近景の作品まで、実に多様である。現在、神奈川大学非文字資料研究センターの絵引研究班では、渋沢が始めた絵引の手法で、近世の図像資料を分析している。事物や行為の名称確定から始め、描かれた景観・場の持つ意味・季節・年中行事や芸能 etc. を読み解くべく、異なる分野の研究者たちが知恵を出し合っている。

「絵引」というユニークな手法は、歴史・民俗学研究における図像資料活用の可能性を広げ、さらには図像資料自体が持つインパクトを知らしめる可能性を持つと考える。

〔謝辞〕本稿の作成にあたって、神奈川大学日本常民文化研究所の窪田涼子氏にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

【注】

- (1) 第1巻(1964)は『日本絵巻物全集』第9巻の付録、第2巻(1965)は第17巻の付録として世に出た。第3巻(1966)は第20巻の付録で、この号から独立した販売が始まり、巻末に『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の広告も出されている。
- (2) 「童形・鹿杖・門前 ―再刊『絵引』によせて」のち、網野善彦『異形の王権』(平凡社、1993)に収録。この論考で網野氏は、角川版『絵巻物による日本常民生活絵引』発刊時、「学会誌の書評は現れなかったと記憶する」と述べている。
- (3) 山口徹「新版『絵巻物による日本常民生活絵引』の刊行にあたって」(『民具マンスリー』第17巻3号)
- (4) 1984年12月8日号6～7面。
- (5) 五来重『絵巻物と民俗』(角川書店、1981)、264頁。
- (6) 黒田日出男「黒山に籠はいた 開発史から絵画史料論まで」(黒田日出男先生退官記念誌刊行会、2004)、17頁。



中国・台湾・サイパン・シンガポールの神社跡地報告

稲宮 康人

(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

2015年秋から2016年春にかけて行った神社跡地調査について報告する。今回は中国、台湾、サイパン、テニアン、シンガポールに行った。これらを比較することで、神社跡地の現状が地域によって大きく異なっていることがわかるだろう。

中国の神社跡地

華北の神社跡地

2015年9月18日～27日にかけて、華北の神社跡地調査・撮影を行った。河北省邯鄲・張家口・承德と、山西省太原で調査・撮影を行った。

邯鄲大東亜神社跡地

河北省の邯鄲市にあった神社。現在神社跡地の一帯は晋冀魯豫⁽¹⁾ 烈士陵園となっており(資料1)、その中の陳列館が邯鄲大東亜神社跡地である(写真1)。説明板には大東亜神社だったと記されている(写真A)。陳列館の建物が、神社の建物を修復して使っているのか、神社の基壇だけ利用しているのかは、不明である。

邯鄲大東亜神社の初代宮司を務めた杉田忠朗の回想記『海外神社の思い出』に神社創建に関する文章がある。以下に要旨を載せる。

邯鄲大東亜神社は、河北・河南省の18県を氏子区

域とし、各県に神社を造り、その総社を邯鄲に造る予定であった。氏子総代となる各県知事は「大東亜神社」を要望したが、北支海外神社の神職を統括していた北京大使館の決定により地名を加え「邯鄲大東亜神社」となった。海外神社の主管省は大東亜省であった。祭神に両国の神を祭ることになり、中国側の祭神を天帝とするよう各県知事から強い要請があったが、北支大國魂神が祭神になった。内地の官幣社に準じて創立。鎮座祭の時には、両国の要人を狙った八路軍の攻撃があった。

海外神社をめぐる当時の情勢をかいま見ることができる。

蒙疆神社跡地

現在の内蒙古自治区西部を主領域とする蒙古連合自治政府の首都・察哈爾(現・河北)省張家口市にあった神社。当初は町の鎮守である張家口神社として建設を始めたが⁽²⁾、建設中に張家口で飛行機の墜落に巻き込まれ死亡した北白川宮永久親王を祭神に迎えることになり、蒙疆地区の総鎮守たる蒙疆神社へと格上げたのではないかと推測している。永久親王の祖父は、台湾で死亡し台湾特有の祭神となった北白川宮能久親王である。神社跡地は勝利公園となっている。屋根部分が撤去されているが神社建物は残っており、周辺の土地と併せて簡易遊園地として使われている(写真2,3)。拝殿内部は、幼児が玩具の車に乗る遊技場になっていた(写真B)。



写真1 邯鄲大東亜神社跡地。陳列館。



資料1 邯鄲地図「戦友思い出集『邯鄲の夢』」
邯鄲山吹会



写真A 陳列館。説明板。



写真2 疆神社跡地。拝殿だった建物。



写真3 蒙疆神社跡地。本殿だった建物。

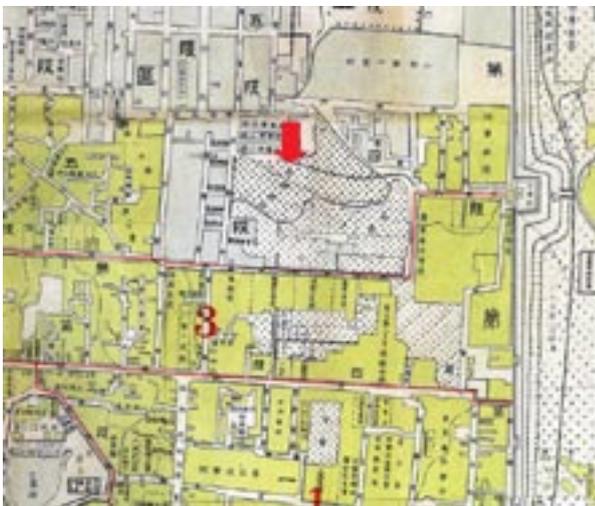


写真B 拝殿内部。

また、本殿内部には資材やゴミが置かれていた。勝利公園の隣は察哈爾烈士陵园になっており、蒙疆忠霊塔⁽³⁾を改造したと思われる革命烈士紀念塔がある(写真C)。

太原神社跡地

太原神社は山西省の省都・太原市にあった。大東門(宣春門)のすぐ近くである(資料3)。1937(昭和12)年、日本軍が侵攻・進駐したことで居留邦人が激増し、1938(昭和13)年に太原神社御造営委員会が成立、1939(昭和14)年に天照大神と明治天皇を祭神にして太原神社が鎮座した。紀元二千六百年に際して神武天皇を合祀している⁽⁴⁾。1942(昭和17)年には神社外苑



資料3 太原地図「太原日本人営業別案内図」太原大日本居留民会



写真C 革命烈士紀念塔。



写真4 太原神社跡地。

にグラウンド⁽⁵⁾が作られ、戦時中には学徒出陣も行われた⁽⁶⁾。神社遺構はなにもない。再開発の際に道路が拡張され、神社跡地は道路やビルになっている(写真4)。

承德神社跡地

関東軍は東北三省と熱河省を満州国の領域と決め、1933年の熱河侵攻によって省都・承德を占領した。承德は清の皇帝が夏を過ごす離宮避暑山荘や外八廟といわれる寺廟のある街である。占領後、安井曾太郎などによってそれらが「発見」され、多くの絵画が描かれた⁽⁷⁾。承德神社は一度遷座しているため、当初創建された場所(写真5)と、遷座後の場所(写真6)それぞれ調査を行った。共に遺構は残っていない。初代承德神社は、1934(昭和9)年に熱河省の総鎮守を創建すべく、武烈河を挟んで承德市街を見下ろす羅漢山の岩の上(当時は神居ヶ丘と呼んでいた)に建てられた(資料2)。しかし、神居ヶ丘は岩山で樹木が育たなかったため、1938(昭和13)年に承德忠霊塔に隣接する丘の上に仮遷座し、1941(昭和16)年に竣工したようである⁽⁸⁾。現在、忠霊塔は熱河革命烈士紀念館になっており、二代目承德神社はこの付近にあったと思われる。紀念館構内には忠霊塔の遺構が展示されている(写真D)。



資料2 承德地図「熱河承德市街地図」



写真5 初代承德神社跡地。中央の岩山の上に神社が建っていた。



写真6 二代目承德神社跡地。左は熱河革命烈士紀念館。紀念館右側に神社があった。



写真D 熱河革命烈士紀念館。忠靈塔説明板。

華南の神社跡地

2015年12月26日～2016年1月2日まで、福建省福州・厦門、広東省汕頭で調査・撮影を行った。全て2013年に調査済みである⁽⁹⁾。新たに判明したことを報告する。

汕頭神社跡地

汕頭市文化館裏手に残る狛犬の周りに、鉄製の柵が設置されていた(写真7)。前回の調査によって狛犬が日本の神社のものだということが判明し、現地の人に価値が「発見」されたことと、戦後70年という節目に日本の侵略が記念されたこと、などの理由で保存方法を変更したのではないかと推測している。

厦門神社跡地

跡地で新たな発見はなかったが、厦門神社創建について書いてある『新厦門』と『台湾居留民三十周年記念誌』を見つけた⁽¹⁰⁾。「在厦門居留民の守護神『厦門神社』建立は、(略)我が海軍、興亜院、台湾総督府、中国側市政府関係当局の絶大なる後援を得て」⁽¹¹⁾や、「厦門台湾居留民会は、(略)事変前の登録戸数は二千四百戸に上り、人口約1万と称されていたが、実数はより以上に上る筈である。」⁽¹²⁾という記述があり、なぜ大陸

の神社に台湾の守護神ともいえる北白川宮能久親王が祀られているのか⁽¹³⁾を解明する手掛かりになると考えている。

シンガポールの神社跡地

2015年7月16日～20日まで、シンガポールで昭南神社跡地の調査・撮影を行った。

昭南神社跡地

占領後大日本帝国は、シンガポールを昭南島と改名した。そしてマクリッチ貯水池に昭南神社を創建した。シンガポールを陥落させた山下奉文陸軍中将の発案である。官幣大社への列格や、南方全域の総鎮守にすることも考えられていた⁽¹⁴⁾。神社跡地はジャングルに埋もれている。池のほとりから本殿へと上る階段、手水鉢、石垣などが残っている(写真8,9)。また、貯水池をまたぐ神橋の橋桁が池の中に残っており、渇水期には橋桁が水面から出てくるようである(写真10)。昭南神社跡地は立入禁止区域の中にある。神社へと通じる道の入り口には立入禁止の標識があり、そこからジャングルの中の道なき道を1時間ほど歩かなければならない。にもかかわらず、撮影している間にあらたにやって来た人もいた。シンガポールでは、結構有名な場所のようであった。マ



写真7 汕頭神社跡地。狛犬。



写真8 昭南神社跡地。手水鉢。ビールや日本酒が置いてあった。



写真9 昭南神社跡地。階段。



写真10 昭南神社跡地。貯水池の向こう側が神社跡地。池の中には神橋の橋桁が残る。



写真11 彩帆香取神社。



写真F 壊れた摂社。

クリッチ貯水池に隣接するゴルフ場へと入っていく所には、昭南神社の説明板が立っている（写真E）。



写真E 昭南神社説明板。

サイパン・テニ안의神社跡地

2015年10月8日～12日までサイパン・テニアン両島で調査・撮影を行った。サイパン島の、彩帆香取神社・泉神社・南興神社、テニアン島の、住吉神社・和泉神社・NKK神社の6社である。2004年に全ての神社について詳細な調査が行われており⁽¹⁵⁾、それを基に調査・撮影を行った。前回調査から11年経ち、

変化が生じた跡地があった。また、新たな遺構が判明した跡地もあったので、併せて報告する。住吉神社・NKK神社は、前回調査と変化がなかったため、割愛する。

彩帆香取神社

2015年8月に台風13号がサイパン島を直撃し、甚大な被害が発生した。彩帆香取神社にも大きな被害があった。神社が建つ公園に生えていた木はほとんど倒れ、以前とは雰囲気が一変していた（写真11）。

神社施設にも大きな被害があり、摂社の建物が全壊し（写真F）、灯籠の笠が地面に落ちたりしていた。神社前の芝生広場には、サイパン平和記念碑に加え、大正大学戦没者慰霊碑が建てられていた。

泉神社跡地

泉神社跡地はジャングルの中に埋もれている。台風で倒れた木々が本殿跡を覆っていた（写真G）。鳥居は破損やひび割れでひどい状態だったが、未だに立っていた（写真12）。木が倒れる場所が違ってれば、この鳥居が倒れたかもしれない。灯籠は落ちてきた枝や葉などにあつく覆われ、確認が難しくなりつつある。



写真G 倒木に覆われた泉神社本殿基壇。



写真12 泉神社跡地。鳥居。



写真13 南興神社跡地。幾つかある灯籠の一つ。



写真 14 和泉神社跡地。神社本殿基壇跡に建つ
キリスト教の祠。



写真 15 和泉神社跡地。鳥居。2基の灯籠。鳥
居左に石柱。



資料 4 神道記念碑。

南興神社跡地

マウント・カーメル教会の墓地の中にある。本殿基壇の上にあったイエス像はなくなっていた。白く塗られた鳥居はそのままである。墓地を通る旧参道沿いに、灯籠の基礎、竿、笠などが幾つもあることを確認した(写真13)。

和泉神社跡地

本殿基壇跡に建てられたキリストの祭壇は、上に十字架を掲げた少し立派な建物になっていた(写真14)。また、鳥居が1基、崩れた灯籠が2基、鳥居の傍らに1本の石柱が残っていることを確認した(写真15)。

日之出神社跡地

DON A.FARREL『TENIAN -A BRIEF HISTORY-』(資料4)によって、前回調査時に日之出神社と推定していた施設は、米軍が建てた記念碑であったと確認できた。

台湾の神社跡地

2016年3月17日～23日にかけて、台湾東部を中心に跡地調査を行った。金子展也『台湾旧神社故地への旅案内ー台湾を護った神々』を基に、花蓮港神社、新城社、台東神社、鹿野神社、霧ヶ丘社の5社の調査・撮影を行った。花蓮港・台東については上記本の内容に

つけ加える発見はなかった。また霧ヶ丘社は既に調査報告がなされている。今回は、新城社跡地と鹿野神社について報告を行う。

新城社跡地

神社跡地はスイスのGrand St.Bernard教団が建てた新城天主堂となっている。鳥居3基が改変され、門として使われている(写真16)。本殿基壇跡にはマリア像が建てられ(写真17)、入り口に置かれた1対の狛犬の台座にはそれぞれ聖母園・萬福源と刻まれている。また天主堂内では手水鉢が洗礼用として使われている。教会の歴史を写真で展示しており、その中には神社の写真も複数あった(写真H)。裏手には石像があり(写真I)、これも神社時代のものであると説明を受けた。また、神社の昔と今とを並べて描いた絵も展示していた(写真J)。



写真 H 1956年の新城社跡地の状態。



写真 16 新城社跡地。門として使われている鳥
居。



写真 17 新城社跡地。神社本殿基壇の上にマ
リア像が建てられている。



写真 I 石像。



写真 J 戦前と現代の新城社本殿を比べた絵。



写真 18 鹿野神社。左の建物が崑慈堂。



写真 19 鹿野神社。

鹿野神社

鹿野神社は台東県の鹿野郷龍田村にあった神社である。この村は台東製糖の募集に応じた日本人が住む移民村だった。日本人が引き揚げ時に祭神を持って帰ったため、現地の人々は、残された神社建物に土地公を祀った。その後、神社建物はなくなり、残った基壇の上に東屋が作られていたが、村や観光局が2015年10月に鳥居・社殿を復元した(写真18,19,K)。ただし、祭神は祀っていない。神社は媽祖などを祀った崑慈堂⁽¹⁶⁾の傍らに位置している。崑慈堂には地区の歴史を展示する龍田博物館も併設している。龍田は日本時代の建物などを生かした観光で売り出しており、この神社も観光名所となっている。撮影のため2時間程現地にいたが、観光客が途切れることなく訪れていた。

おわりに

今回の調査報告の中では、特に台湾で復元された鹿野神社が一番の驚きであった。台湾人による日本神社の復元を、「親日」だから、と言い切ることは無理があるが、他の国々の神社跡地への意識とは一線を画していることは間違いないだろう。また、既に調査された場所を再訪することで、その間に起きた変化を確認することができた。その変化をみることで、その国が神社跡地をどう位置付けているのか、より明瞭になったのではないだろうか。一つひとつ跡地の現況を確認していくことで、旧大東亜共栄圏と現在のアジアとの関係がみえてくるのではないだろうか。



写真 K 鹿野神社説明板。

【注】

- (1) 晋 = 山西省、冀 = 河北省、魯 = 山東省、豫 = 河南省。邯鄲はこれら4省の中央に位置する交通の要衝。共産党の抗日根拠地「晋冀魯豫辺区」に対応した烈士陵园。
- (2) 大阪朝日新聞北支版 1939(昭和14)年5月3日
- (3) 横山篤夫「日本軍が中国に建設した十三基の忠霊塔」
- (4) 『大陸神社大観』P507
- (5) 徳永智「日中戦争下の山西省太原都市計画事業」アジア経済 2013-6
- (6) 太原日本中学校同窓会『黄土燃ゆ 太中青春への回帰太原 日本中学校同窓会誌』
- (7) 稲賀繁美「白頭山・承德・ハルハ河畔：偽満洲国の文化象徴とその表象」豊田市美術館『近代の東アジアイメージ 日本近代美術はどうアジアを描いてきたか』
- (8) 岩下傳四郎『大陸神社大観』大陸神社連盟 P487
- (9) 渡邊奈津子「中国福建・広東省海外神社跡地を訪ねて - 汕頭神社、厦門神社、福州神社について -」『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』神奈川大学非文字資料研究センター
- (10) 別所孝二『新厦門』は東京都立中央図書館蔵。『台湾居留民三十周年記念誌』は中央研究院台湾史研究所台湾研究古籍資料庫デジタル化史料。http://rarebooks.ith.sinica.edu.tw/sinicafrsFront99/index.htm
- (11) 前掲『新厦門』P25
- (12) 前掲『新厦門』P26
- (13) (9) 論文 P99
- (14) 大澤広嗣「昭南神社 - 創健から終焉まで -」『シンガポール都市論 アジア遊学 123』
- (15) 富井正憲、中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン『旧南洋群島の海外神社跡地報告』
- (16) 花東縦谷国家風景区：崑慈堂 http://www.erv-nsa.gov.tw/user/Article.aspx?Lang=3&SNo=03000152



九江・沙市・漢口の旧租界地を回っての報告

大里 浩秋 (非文字資料研究センター 客員研究員)
 孫 安 石 (非文字資料研究センター 研究員)
 内田 青蔵 (非文字資料研究センター長)

沙市と廬山を中心に

大里 浩秋

1. はじめに

2016年3月13日から19日まで、内田青蔵・孫安石・大里浩秋の3人が中国江西省九江市、湖北省荊州市沙市、同省武漢市漢口に出かけて、旧租界地区を中心に現地の今の様子を見て回った。以下、大里からは沙市を主に、廬山を従って報告をするが、その前に日程と回った先などを記す。

3月13日	羽田→上海浦東、地下鉄で移動、虹橋飛行場→南昌飛行場→車で移動3時間、九江泊。
14日	九江市内、美孚洋行(スタンダード石油)旧址、台湾銀行旧址、長江、旧租界商店街、1938年開設の日本領事館旧址、廬山ふもとにある東林寺(384年慧遠が始めた浄土宗の寺)などを見学。
15日	九江南方、車で2時間の廬山見学。
16日	九江→列車で3時間、武昌→車で3時間、沙市泊
17日	沙市の旧日本租界があったあたりを歩く。地方史研究者劉作忠さん宅で資料を見せてもらう。荊州城壁見学→車で3時間、漢口・滙申大酒店(旧日本領事館)泊、夜近くの長江を見学。
18日	漢口旧日本租界、仏、英租界を歩く。
19日	武漢飛行場→上海浦東→羽田。

この間、飛行機での移動以外は主に車での移動となり、また漢口以外は初めての訪問先だったこともあり、九江出身でたまたま帰省中だった本学中国言語文化博士課程在籍の王子成君とご両親、私がかつて広州外国語学院で日本語を教えた時の学生で武昌在住の劉建強さんのお世話になり、他に、本学に縁の深い李百浩東南大学建築学院教授には道案内の紹介などでお世話になった。

2. 廬山一瞥

中国指折りの名山として知られる廬山は、私にとっては、1937年7月7日の廬溝橋事件をきっかけに日本軍が中国との全面戦争に踏み切った際に蒋介石総統が徹底抗戦を表明する「廬山談話」を発表した場所として、

さらには1959年9月、毛沢東が主導した大躍進政策の問題点を指摘した彭徳懐に対して、毛は聞き入れないばかりか逆に彭を批判して国防相を辞任させた中国共産党政治局拡大会議「廬山会議」が行われた場所として知っているだけだった。が、今回案内してもらったおかげで、1474メートルの頂上近くに平地が広がっており、そこに19世紀末以降西洋諸国の宣教師がキリスト教の布教を行い住みつくようになって、租界の名は付かないながら西洋人の特権的保養地が形成されたこと、その後、1927年に漢口で起こったイギリス兵と住民のトラブルから漢口・九江のイギリス租界を中国が回収する動きに発展し、その際廬山の行政管理権も中国政府に返還されたことを知った。そして、30年代には国民政府の夏の首都と称されるほど政府高官に利用され、さらに50年代からは中共政権の高官の避暑地となって、前述の廬山談話や廬山会議と結びつくことになるけれども、その間に挟まれた日中戦争期にはこの地区にも日本軍の侵攻があったことを、廬山図書館を訪ねて劉廬松館長に紹介された数冊の本で知ることとなった。

3. 旧沙市日本租界

日清戦争勝利の後始末として、日本政府は1895年の下関条約で多額の賠償金を得たうえ、中国への経済進出を図るべく、台湾・澎湖島・遼東半島を領有し、かつ重慶・沙市・杭州・蘇州に租界を置くことを認めさせた(のち遼東半島については、三国干渉に遭い返還した)。しかし、上記四つの租界は何れも設置を決めた後も容易に開発が進まず、そのうちの沙市は開発に手をかけることもないまま、名前のみ存在したといわれて今に語り継がれている。これまで中国における旧日本租界を調査してきた者として、沙市租界の実態はどんなもので今それがどうなっているかを現地に出かけて確認したいものだと長いこと思っていて、それが今回実現することになった。

出発前に確認した資料は以下の通りである。

(1)外務省警察史『在沙市領事館(未定稿)』、不二出版復

刻版

- (2)拙文「湖南と伍一・宗方小太郎の関係」(下)、『湖南』第31号
- (3)東亜同文会『東亜時論』第1号、6号、16号、17号、25号の沙市関連記事
- (4)『在沙市帝国領事館管轄区域内事情』、外務省通商局、大正13年
- (5)日本軍作成の現地地図、作成年不明、アジア歴史資料センターより入手

このうち、(1)には、1896年に領事館を開設した時の様子に始まり1936年に至るまでの在住日本人の経済活動、現地住民との関係などが書かれている。(1)にはまた、1898年に日本が租界を開こうとする直前に起こった排外暴動で領事館が焼打ちに遭う「沙市事件」の詳細が記され、この事件に対する論評が(2)で紹介されている。さらに(3)には、租界の開設を決めた直後の沙市での貿易状況を、統計を交えつつその振るわない状況が伝わる内容で書かれている。そして(4)は、(3)から20年余り経った沙市における日本人の定着状況を含む沙市周囲の概況を述べる中で、「沙市日本居留地は明治三十一年八月一八日成立を見たる同居留地章程により確定せるものにして洋碼頭荊州官地西境より起りて南下すること長江に沿ひ直長三百八十丈…の地区なれとも今日尚未た経営せらるゝの時期に至らず現に少許の支那家屋ある外一望の耕地として存するに過ぎるか所謂万城大堤の一部を為す堤防の外にあるを以て夏季最大増水時に於ては一面に一二尺の浸水を免れず、愈々経営に着手する際には護岸工事及填立等により之か防止の施設を要すべきなり」(原文のカタカナをひらがなにした)とする。つまりは、長江の増水を防ぐ工事をしない限りは租界を開くことはできず、できないままでイギリス・アメリカなどと競合して、日本租界として決めた土地に隣接する「洋碼頭」(外国人商人の為に設置した埠頭)に日本の領事館や数軒の企業の事務所を置いた状況が長く続いたというわけである。



写真1 浸水中の洋碼頭、中央奥の角張った屋根の建物が日本領事館

そこで、(5)の地図(孫氏の文中の図1)を頼りに車で現地に向かった。李教授が紹介してく

れた沙市出身の盧川氏の案内よろしく、かつて長江の洪水が街中に流入するのを防ぐた

めに築かれたという「万里堤」の目印ともいべき亭を見つけ、その先、堤の外側長江沿いの「洋碼頭」と呼ばれたあたりの道を、古いといっても洋館ではなくて中国風の工場やら民家が散在するのを横目に見ながら南にかなり歩くと、今度は左右は草茫々で人が歩くことでできた狭い道に変わった。さて洋碼頭はどこまで、どこか



写真2 万里堤の目印の亭、中央に続く道がかつて長江の浸水を防ぐために築いた万里堤の後

らが日本租界予定地かと迷ったが、(5)の地図を眺めつつ少し戻って脇道に入ったところに大きなスペースを占めるSINOPECの事務所があつた。

そこが地図にあるスタンダードの位置に当たると分かり、その辺に沼地がいくつかあることから手書きとはいえ地図の描き方に間違いがなさそうなことから、再度草茫々のあたりに戻り、この辺から租界予定地が始まるらしいと見当をつけた。

ところで、道案内をしてくれた盧川氏も、彼が電話で呼び出して現地まで足を運んでくれた地元の歴史研究者劉作忠氏も、草茫々のあたりではなくて洋碼頭のあたりが日本租界の跡だと言って譲らないので、ひとしきり意見を交わすことになったが、予め見ていた資料の内容と(5)の地図からして、私たちの判断の方が当たっていると確信した。しかし考えてみれば、1890年代末以来日中戦争敗北までの間洋碼頭付近を日本人が出入りしているのを見た住民やその子孫にとって、そこを日本租界と誤解しても無理はないのである。



写真3 左右に草が生えているあたりから前方に、開発されないうままに終わった旧日本租界があったと推定される

こうして、念願の沙市現地調査が終わった。もっと間近に長江が迫る位置に日本領事館のある洋碼頭があり、それゆえにそこに置かれた建物

が漸並み洪水の被害に遭うことがあったという記録を読んでいたせいか、長年の河水の浸食のために、現実の長江はやや離れていて、工事に河岸の砂をすくってはどこかへ運ぶトラックがしきりに行き来するのは、来てみないと分からない光景であった。



租界とスタンダード石油会社の跡地の景観変容について

孫 安 石

上海の都市研究、または中国の租界研究を名乗ってはいくものの九江、沙市を訪ねることは初めてであった。租界研究の先輩格である大里浩秋先生からの「上海を飛び出そう」という誘いに乗っていざ参加を決めたものの手元にある資料は『外務省警察史』の中に含まれている九江と沙市の部、そして、費成康『中国租界史』（上海社会科学院、1991年）程度しかなく、急遽アジア歴史資料センターにて九江と沙市の租界に関連する地図を探すことになった。

そこで見つけたのが、第三艦隊司令部編『揚子江案内』（第三艦隊司令部、1935年）に含まれていた一連の地図であった（図1）。



図1 沙市の地図（部分拡大）

当時の日本にとって揚子江の精確な河道を把握することは、揚子江を航行し、駐留する海軍の軍艦が、安全な航路を確保するためにも、

そして、欧米諸国との内航河川の既得権競争において有利な地位を確保するという貿易上の利益のためにも重要な事案の一つであった。それらの目的を達成するために作成されたのが、第三艦隊司令部編『揚子江案内』であった。

ところが、この地図を眺めていた私の目にスタンダード（「美孚油」、「亜細亜」などという文字が目についたのである。その時、私は、呉翎君『美孚石油公司在中国』（台湾、稻郷出版社、2001年）を思い出した。19世紀後半に入ると近代的な産業革命の影響は本格的に中国に押し寄せ、欧米諸国に開放された貿易港と「租界」には各種の近代的な産業が次々と誕生したが、そこに欠かすことができなかった動力源の一つが石油であった。そして、中国で最も頭角を現したのが、アメリカ・ニューヨークに拠点を置いた American Standard Oil Co. of New York（美孚洋行、スタンダード石油）で、同社は1870年代には中国に進出し、1913年に上海に Texaco Petroleum Co.（テキサコ石油）が進出するまでほぼ40年間にわたり中国の石油市場を独占していたのである。

外務省外交史料館で見つけた揚子江沿いの各都市の地図

には、実は当時の中国の石油市場を独占していたスタンダード石油とテキサコ石油、そして、イギリス資本の亜細亜石油会社（Asiatic Petroleum Co.）がそれぞれ保有していた石油備蓄庫の場所が記されていたのである。そこで、今回の私の九江、沙市、漢口行きの目的は定まった。スタンダード石油会社の九江支社や沙市の石油備蓄庫、そして、亜細亜石油の漢口支店の建物を直接、この目で確認したい、というものである。

『外務省警察史』（不二出版、2001年）の「在九江領事館」の部によれば、20世紀の初期の日本人がみた九江という都市は、九江と南昌を結ぶ江西鉄道と九江を起点とする日清汽船会社の長江航路が始まる、漢口に次ぐ一大貿易港というイメージであつたらしい。しかし、意外にも日本人で九江に在留する人は多くなく、1918年に42戸132名が在留し、小学校が設立されるのも1919年に入ってからのも出来事であった。台湾銀行の九江支店が1912年、漢口支店が1915年に開設されたといわれるから、日本人が在留するより、銀行資本が一步先を見ていたともいえる。

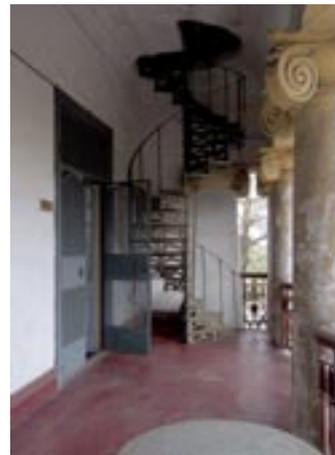


図2 九江の「美孚洋行」旧跡（二階テラスの部分）

ところが呉翎君の研究によれば、スタンダード石油会社は、1903年に上海の浦東に石油備蓄の設備を建設したのを皮切りに、1904年には煙台と漢口に、1906年には鎮江に、1908年には福州と厦門に、1910年には沙市にそれぞれ石油備蓄設備を完成させ、ほぼ中国全土をカバーする

石油備蓄のネットワークを築いた、というからその進出の速さには驚くべきものがある。【図2】の「美孚洋行」の旧跡は説明によれば、1910年に南側が完成し、北側の部分は1918年にイギリスの亜細亜石油会社によって完成したという。当時の石油事業で繁盛したスタンダード石油会社の栄華をしのばせるようなルネサンス様式を採用したコンクリート建築であった。「美孚洋行」の九江支店の二階のテラスからは長江の流れを目の当たりにすることができることから、スタンダード石油会社は九江の交通の要衝を抑える場所に九江支店を設置したということであろう。



図3 棧橋から九江港を望む

九江を訪れて驚いたことの一つは、九江の港の機能の変化であった。かつては、漢口と九江を結ぶ

貿易港として繁栄をみせた港の機能は、近年の急速な高速道路の建設や新幹線の拡大などにより港の機能は大幅に減少し、いまは貨物の輸送として僅かな部分が使われるのみであるというから驚きである（図3を参照）。

九江で感じたことが租界の景観変容の大きさであったとすれば、場所を移動して沙市で感じたことは、租界の景観変容がほぼ見られないという景観の持続性であった。沙市の日本租界の場所を特定するために、建設用の大型トラックが往来するほこりだらけの長江の畔を半日以上歩いた結果、唯一確実に場所を特定できそうな施設であったのが、実はいまから100年以上前に設置されたスタンダード石油会社の石油備蓄庫であったのである。日本租界の場所を特定する我々の調査に駆け付けてくれた荊州の郷土史家の劉作忠氏も加わった現地調査で、かつてのスタンダード石油会社の石油備蓄庫が、現在は中国石油化工集団(SINOPEC)の石油備蓄庫として活躍していると確認したことで、やっとパズルの謎が解け、日本租界の場所を特定することができたのである。なるほど地図上の建物が撤去されることはあっても都市の機能としての景観はなかなか変わらないものであると改めて感じたのである。

2005年以來の10年ぶりの訪問であった漢口の訪問では、当然のことながら街並みの変化に驚いた。前回の訪問では瓦礫の山であった民団小学校には、上海の新天地を彷彿させる劇的な変化をみせていた。かつて日本租界のはずれであった場所は、今や都市再開発が進むモダン漢口を代表する地域に様変わりしていたのである。

漢口で目当てにしていたのは、スタンダード石油の最大のライバル会社であった亜細亜石油会社の漢口支店を見学することであった。

幸い、亜細亜石油会社の漢口支店はすぐ場所が特定でき、現在は「臨江飯店」として営業を続けていることがわかった。この建物は1924年に亜細亜石油会社の事務所ビルとして完成したというから、今までほぼ90年以上、その華麗な風貌を維持してきたことになる。さっそく内部の見学を申



図4 亜細亜石油会社の漢口支店

し入れたが、「臨江飯店」は解放の初期には空軍の駐屯地として利用され、いま現在でも中国人民解放軍の関係者が利用するホテルとして指定されているところから、外国人の見学や宿泊などはできない、との返事であった。

実はこの亜細亜石油会社は、1920年代に上海でもスタンダード石油会社と石油備蓄施設の建設を巡って激しく対立していた。即ち、亜細亜石油会社は上海の浦東地区の埠頭に新たに「ベンジタンク」を建設することを「上海総商業会議所」に申し出て、一旦、特別委員会が設置され、欧米の領事団会議においても賛成の意見が出されたが、スタンダード石油会社は、イギリス系の資本だけではなくスタンダード石油会社に対しても同じく危険物取扱いの規制を緩和すべきであるという意見を開陳し、両社は既得権益の拡大をめぐる激しく対立したのである。

九江、沙市、漢口の旧租界を回り往時の石油会社の跡地を巡りながら感じたことは、実は都市景観の急激な変容からというよりも、変わらない租界の景観に多くのことを学ぶことができた調査であったということだった。

漢口の建築について

内田 青蔵

1. はじめに

租界班のひとりとして、東アジアの租界の比較研究のために横浜居留地のモデルと称される上海の旧租界地を訪ねる機会が増えたが、九江はもとより沙市と漢口の旧日本租界地を訪ねるのは初めてのことだった。それもあるが、今回の調査は、驚きの連続だった。とりわけ、漢口に関しては、租界班のメンバーの大里・孫・富井が既に研究成果をまとめており（『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』大里・孫編著 御茶の水書房2006年）、おおよそのイメージは持っていたが、旧イギリス租界から始まる各旧租界地のバンドに連なる建築群の景観は見事で、個々の建築の質はともかくも、上海のバンドの景観にも負けない連続性と壮大さを感じさせる



ものだった。今回は調査時間が短く、バンドの魅力を十分に堪能する時間はなかったが、それでもこの連続した重厚な建築群の景観が旧日本租界地付近前で途切れていることからだけでも、旧日本租界地の当時の様相はも



図1 武漢税関（旧江漢関：1921年）

とより今日の漢口における位置づけが理解できるように感じられた（図1：武漢税関：1921年竣工）。

2. 漢口日本租界地の開設の経緯

1858年の清朝とイギリスによる「天津条約」により、広州・天津・鎮江・漢口・九江そして厦門の6つの都市に租界の開設が認められた。イギリスは1861年に「英国漢口租地原約」を結び、護岸工事もとより、バンドの設置とともにグリッドプランによる土地整理事業を進め、漢口に租界地を開設した。その後、日清戦争の清朝の敗戦を機に、ドイツ（1895年）・ロシア（1896年）・フランス（1896年）そして日本が漢口に独自の租界地の権利を獲得した。

日本は1898年に「漢口日本居留地取極書」を取り交わし、日本租界地が決定した。その後の1907年には、交渉の末に新たに既存の租界地の北側に拡張地が設けられた。当初の租界地とその拡張地からなる日本租界地は、

面積はロシアやフランスの租界地よりも広いものであったが、他国と比べると取得時期が遅かったこともあって中心市街地から最も離れた揚子江下流の立地条件の悪い場所であった。そのため、日本政府は、土地の売却前に護岸工事や低地の埋め立て工事などの土地整理事業を行った。当初の租界地エリアの整備は大倉土木組、1907年に新に入手した拡張地エリアの整備は東京建物株式会社が先行し、当初の租界地の整備は1909年には終了した。この整備に前後して土地の売却が行われ、また、フランス租界に設けられていた領事館の移転も開始されるなど、日本租界地へのさまざまな建築の建設が始まった（図2：李江氏作成の漢口租界拡張模式図）。

3. 漢口の日本租界地再見

1909年以降発展した日本租界地の様子をよく示しているといわれるのが、1930年の「日本租界全図：PLAN OF JAPANESE CONCESSION HANKOW」である。租界班のメンバーである富井は、この地図を手掛かりに2005年に現地調査を行い、現存する建物として発見した12例の建築を紹介している（『漢口日本租界の都市空間史』『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』所集）（図3：2005年建築物現況概略配置図）。

今回の調査は、筆者にとって初めての漢口訪問ということもあって、この現況図を手掛かりに租界地を再見した。その結果、2005年当時特定された12例は、今回の2016年においても現存を確認することができた。それでも、それぞれの建物の扱いは微妙に異なっていた。例えば、①の旧三井物産社宅は、空き室が多く見られ、

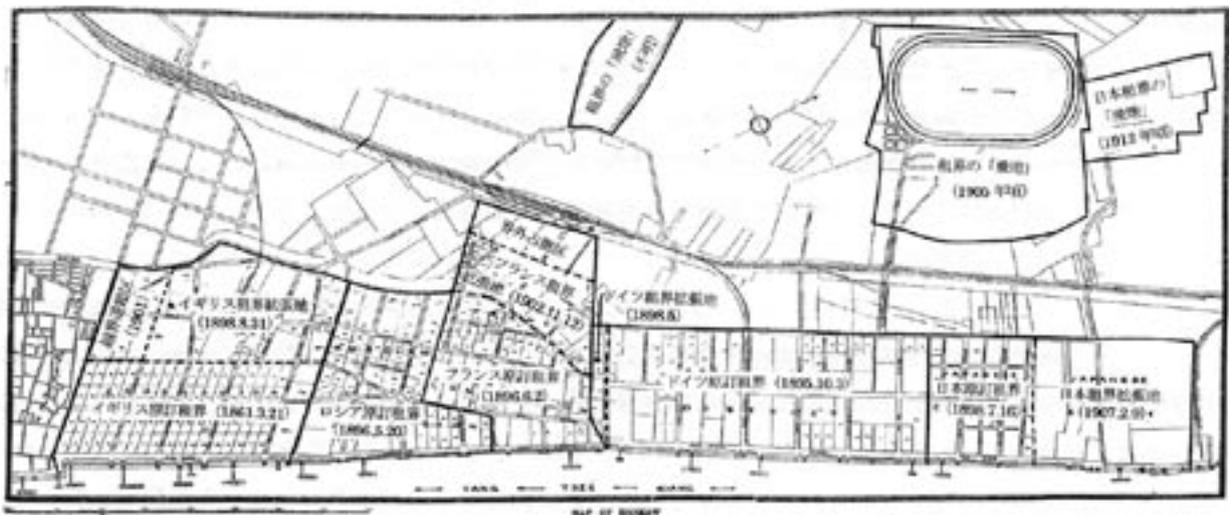


図2 漢口租界拡張模式図（李江「漢口租界の都市と建築」『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』より）



- ① 三井物産社宅
- ② 領事館
- ③ 海軍陸戦隊
- ④ 同仁会病院院長住宅
- ⑤ 領事館官舎
- ⑥ 測候所
- ⑦ 日華製油社宅
- ⑧ 警察官舎
- ⑨ 花月住宅
- ⑩ 共同住宅
- ⑪ 東京建物住宅
- ⑫ 民団小学校住宅

図3 漢口旧日本租界地の2005年現況建物概略配置図（富井・白井「漢口日本租界地の都市空間史」『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』より）

将来的には再開発され消えていく危険性が感じられた。また、⑨の旧花月住宅、⑩の共同住宅、⑪の旧東京建物住宅は、住宅としての使用が継続されつつも建物の痛みも進行しつつあり、また、これらの接する旧大正街は拡幅され、交通量も多い道路と化していた。こうした道路に接する立地とその環境を考えれば、これらの建物も将来的には再開発の対象になり得る可能性も高いと云えよう。実際、⑫の旧民団小学校住宅は2005年当時廃屋で、その存在が危ぶまれていたが、建物はブティックの店舗に再利用され、外観だけが残されていた（図4：ブティックに再利用）。



図4 旧民団小学校住宅（現在、ブティックとして再利用されている）

この旧民団小学校住宅や隣の旧漢口神社敷地を含め、この旧租界地の最北部ゾーンは揚子江側も含め、カフェやレストラン、ブティックなどを中心とした「武漢天地」・「新天地」と呼ばれる高級ショッピングゾーンに開発されていた。その再開発にあたって、この旧民団小学校住宅などが歴史性を感じさせる重要な建物として再利用されているのである。この地

域は、李百浩・李彩両氏（『武漢における旧日本租界の建築再生』『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』所集）も指摘しているように、租界当時から工場や里弄住宅とともに空き地の多かった地区であり、他国の租界エリアのような重要な歴史的な建築がほとんど存在せず、存在していてもまばらな状況であったことから再開発には適したエリアと考えられたといえる。いずれにせよ、旧日本租界地は、今後、ますます再開発の手が入り込む可能性が高いエリアといえるであろう。その意味では、旧日本租界地時代の建物が取り壊されてしまう可能性が高いといえよう。ただ、そうした中で⑪の旧東京建物住宅は、旧日本租界の拡張地の土地整理事業を行った東京建物株式会社の建物であり、旧租界の歴史を考えると貴重な建築遺構といえ、日本側から見ればその保存を求めたい建築のひとつといえるし、総領事館などのような利活用を期待したいと思う。

なお、今回の再見の中で、当時の建物の遺構を一つ新たに発見した。旧中街と旧大正街の交差部に位置する旧大石洋行の鉄筋コンクリート構造の4階建ての建物である。現在は、「八路軍武漢弁事処旧址纪念馆」として再利用されている（図5）。建築年代は不明だが、漢口在住の方が書き残した昭和12（1937）年前の日本租界地図にも「大石洋行」の名称が確認でき、昭和12年以前から営業を行っていたことがわかる。



図5 旧大石洋行（現在、「八路軍武漢弁事処旧址纪念馆」として再利用されている）

一方、昭和12年の日中戦争が始まると、漢口の日本人在留民は引き揚げるなかで、第12航空隊

が漢口攻略作戦を展開し、翌13年には日本陸海軍が漢口を占領し、租界が再開されることになる。ただ、その間に租界地の建物は、爆破や放火などを受け、多くの被害を受けている。漢口の花輪総領事が外務大臣近衛文麿に提出した昭和13年10月28日付けの「漢口ニ於ケル邦人権益被害状況二関スル件」によれば、爆破された建物として1：漢口日本総領事館及び総領事館邸、2：横浜正金銀行漢口支店長舎宅とともに3：大石洋行（二、三、四階ハ従来警察官舎）とある。また、放火などで全焼したのとして漢口神社、漢口海軍陸戦隊本部、漢口日本居留民団事務所、漢口日本小学校、漢口同仁会医院、日華製油株式会社舎宅・工場、などが列記されている。これから大石洋行の建物は、昭和13年に爆破されており、現存する建物は、その後に再建されたもので、1938-1943年の間の建物であることが推測される。また、現存建物として知られる③海軍陸戦隊も昭和13年に全焼したものとあり、この建物も大石洋行同様に1938-1943年の間に再建された建物の可能性がある。

4. むすびにかえて…漢口の日本総領事館建築について

建築史を専門とする側から見て、漢口の旧日本租界地の建物で興味深いのが日本総領事館である。大改造を経ているとはいいながらも、総領事館がホテルとして再利用されながら現存していることは極めて特異といえるし、歴史的建造物の利活用の事例としても注目したい(図6)。

漢口の領事館の歴史を振り返れば、租界地の整備が終わると、フランス租界にあった日本領事館を移転している。その際、日本政府は、蘇州・杭州・南京の日本領事館を廃止し、代わって漢口の領事館を上海と廈門と同様に総領事館に昇格させている。そのため、漢口の総領事館は、建築としても諸外国と比較しても遜色のない高い質が求められたと考えられる。ただ、現存する日本総領事館建築は、この時期のものではない。フランス租界の



図6 旧日本漢口総領事館（現在、ホテルとして再利用されている）

ものを最初の建築とすれば、租界に最初に建てられたものは2代目の総領事館建築といえる。ただ、

先に触れたように、この2代目の建築がその後いつまで存続していたのかは不明であるが、昭和13年に爆破された総領事館が2代目の建築と考えれば、現存する建物はこれに次ぐ3代目の総領事館となる。

ちなみに、2代目の総領事館は、2階建ての領事館事務所と3階建ての領事館公館からなり、1910年に竣工している。領事館事務所は、領事館関係と警察局関係部署からなり、領事館関係は1階が領事館事務所、2階が事務官宿舎、警察局関係は1階が警察局事務所と刑務所、2階が警察宿舎であった。領事館公館は、1階が玄関部や娯楽室とともに厨房・使用人室などのサービス空間、2階は主に接客用空間、3階は総領事家族の宿舎であった。設計は、福井房一（1869-1937）で、東京工手学校卒業後、アメリカのニューヨークの建築事務所で働く傍ら、クーパーユニオン・カレッジの建築学科を卒業した建築家であった。海軍技師を経て、1907年に漢口で福井工務所を開設し、1911年秋まで建築家として多くの仕事を残した。漢口総領事館は、福井の代表作品のひとつでもあった。

現存する旧総領事館は、昭和14年から図面などが用意され、昭和17年に竣工したものと推定される。現存する建物は4階建てであるが、外観からの目視からでも当初は3階建てで、4階部分は増築であることがわかる。ただ、内部に関しては、目視ではわからない。ちなみに、この現存する総領事館並びに領事館公館に関すると思われる建築計画図面が現存することが確認できた。詳細は不明だが、今後は、租界地を象徴する建築として、これらの資料を詳細に検討し、2代目の総領事館事務所ならびに総領事館公館との関係性、あるいは、領事館建築の特徴などの一端を明らかにするとともに、租界地の景観上の意味などを検討したいと考えている。



パターンランゲージ試論

森住 哲也 (神奈川大学工学部)

1. はじめに

私がチャレンジしている研究テーマは、ウィトゲンシュタイン、ジル・ドゥルーズ、世阿弥の示す哲学的概念をインターネットの舞台上に登場させ、『ただ生きるのではなく、善く生きる、(ソクラテス)』ための言語的ツールとしての概念装置とシステムを提示しようというもので、大そう長い期間を費やしてきたように感じる。ところで、このテーマの設定自体は妥当なのだろうか？すなわち、哲学と工学という、互いの連関性が希薄な領野が共存する事、あるいはウィトゲンシュタインとドゥルーズ、西洋哲学的な概念と世阿弥能楽論、という異質で相容れない概念を同じ舞台上に乗せる事、とは何か？

本稿ではこの研究の立ち位置を改めて指し示す事を試みる。

2. 研究テーマの概念的位置付け

(1) 局所的相対主義

本稿で提案する概念は「1つの原理、或いは1つの公理系によって世界を基礎付ける概念」ではない。それに代わる局所的相対主義は、局所的な文脈に哲学的原理を封じ込め、かつ流通可能とし、全体を原理無しと言語論の立ち位置から示す戦略である。すなわち、『<私>という主体と他者という客体に分離された世界の原理を考えるのではなく、『他者が記号化した私を<私>が他者との文脈の中に「その私として見る』という方法で、ウィトゲンシュタインの“アスペクトゲーム^{[1][2]}”を実践する。それぞれの<私>は振舞いのパターンを交換する“言語ゲーム^[2]”に参加する事で世界が徐々に繋がっていく、とする。

(2) 言語ゲームとアスペクトゲーム

一つの原理に基礎付けられる事なく社会を成立させるために、<私>と他者のテキストの振舞いが互いに相互作用し、テキストの振舞いの群れが形成される言語論的な仕組みが必要である。ウィトゲンシュタインの言語ゲ

ーム^[2]の構造はその必要条件の一つである。

しかし一方で、言語ゲームは<私>の存在意味にも局所的な家族的類似の規則にしたがい、他者に接続される事を要請される。したがって<私>自身が排除されてしまうという「世界の記述限界」を抜け出せない。ウィトゲンシュタインは“論理哲学論考^[3]”で世界の限界を示したが“言語ゲーム^[2]”でもなおその限界は解消されなかった。

しかしながら言語論の外から知覚すれば、<私>と他者はテキストの振舞いとしてただ現働的 (actual)^[6]に現れるだけでなく、他者と<私>の潜在的^[6]なテキストに潜んでいる。その容態を<私>は知覚しなくてはならない。ここにウィトゲンシュタインの“アスペクト知覚^[2]”の概念の意義がある。

アスペクト知覚の作用は、<私>が他者の振舞いを「〜として見る」^[1]という「直観的な方法」にはたらきかける。すなわち他者の振舞いは、<私>が「他者の振舞いを〜として見る」パターンに還元される。

また、アスペクト知覚は感覚与件の分析によって得られるのではなく「閃き」という、むしろアートに類する感覚から得られる。しかし、ただ閃くのではない。その閃きは文脈というテキストの振舞いの群れ (例えばビッグデータとしてのテキスト) の間の相互作用を<私>が知覚する事を支援するシステムによって「閃く事を促される」のである。

(3) 〜として他者を見る<私>

デカルト的哲学の「私」の概念は「我」という閉論理空間から世界を観察する事から成立する。あるいは他者とは閉論理空間に還元された記号であって、<私>が作用する object に過ぎない。それは、他者にとっても類似的に成立しなければならない。すなわち、このシステムでは、他者も私を世界の中の object として観察する。したがって<私>の存在は相対的なものとなり、「我」は世界の基準になり得ない。



この様な他者性のアポリアを回避するための必要条件は、他者を<私>の閉論理空間の1つの要素に還元するのではなく、<私>と他者の相互作用を「他者の側に立って私を観察する態度」(~として見る態度)が必要条件である。それは他者にとっても「類似的態度」であり、こうして作られる『時空のスナップショット^[7]』を自律分散的な<私>がsimulationし実践する事で、社会が形成される。すなわち、それは言語論的転回からアートの転回を志向する逃走線であり。或いは「多面的な」言語ゲームとでも言うべき概念である。

(4) 『離見の見』から論理的振舞いへ

自他の振舞いの中で、<私>の振舞いを<私>が他者を通して知覚する、という振舞いのアスペクト知覚の作用は、世阿弥能楽論で示される『離見の見^[4]』に類似する概念である (Fig.1)。

『離見の見』とはすなわち、「<私>の振舞いの<仮面>の裏に於いて他者を観察し意識することによって、言語ゲーム「としてのわたし」を見る」、というアスペクト知覚であると解釈される。すなわち、<私>は他者によって「~として見られている」のであり、他者は<私>と不可分な相互作用の中に在る。もちろんこのままでは独我論的世界観に終始してしまう。したがって一般性、客観性に繋がる概念装置を必要とする。「言語ゲーム的群知能」はその必要条件である。

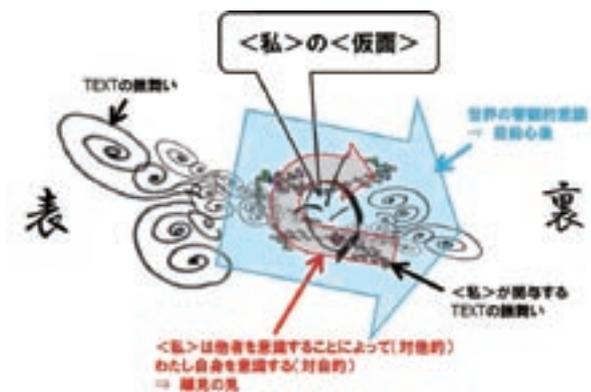


Fig.1 『離見の見』のイメージ

<私>と他者の『離見の看的言語ゲーム規則』は、やがて論理的命題へと凝縮し、『科学的論理的システムとしてのたまさかの振舞いへと収束させる可能性』を持つ。それは、『離見の見』と言語ゲームを繰り返す中で蓄積されオープンにされる日常的会話のテキストを、その振舞いの群れの中の『変動的な普遍』に整合させ論

理的理論を形成してゆく一つの振舞いとして解釈できる。言い換えればそれは、世阿弥の言う『目前心後』に類する概念であろう。

すなわち、世阿弥の能楽論は、言語ゲームとアスペクトゲームを繋ぐための直観的方法としての必要条件である。

(5) クラウドの倫理

<私>のアスペクトゲームは言語ゲームに還元される。アスペクトゲームは<私>の振舞いの『離見の見』である。このビジョンをクラウドのインタフェースとして設計するヒントは世阿弥の二曲三体論の老体、女体、軍体をアスペクトの閃きのパターンとして解釈する事にあるのではないだろうか？ 世阿弥三体はビッグデータとしてのテキストの振舞いのパターンに対する潜在的なアスペクト知覚に、いかに作用し、言語ゲームとして現働化するのだろうか？例えば；

人間社会の衰退、縮小、分割、合併に伴う悲哀や怨嗟はどのように社会の不安定に繋がっていくのか？

組織の規則にしたがいそして翻弄される人々の行為の妥当性をどのように解釈するべきか？

組織の規則の賛美、あるいは反動の萌芽に対して<私>はどのように対応すれば善く生きる事になるのか？

これらの問いの答えに導く概念装置を発明(発見ではなく)すれば言語ゲームのシステム設計が成就される。この時、それぞれのアスペクト知覚を示すテキストは、システムの一部であり全体でもある作用の“襞、(ドールズ)”の中で、他と交わり、交叉し、突然変異し、ビッグデータを形成してゆくだろう。

3. パターンランゲージ

パターンランゲージとしてのクラウドシステムのイメージを Fig.2 に示す。Fig.2 は、膨大なテキストの断片が時間と空間を錯綜して作用しあう“時空の結晶”の中で、<私>と他者が『離見の見』の境地でテキストの振舞いの断片を交換するパターンランゲージのイメージを示している。その概念の概要を以下に示す；

- ①<私>とは、他者のアスペクトゲーム^[2]が理解出来ない意味盲^{[1][2]}である事が出発点である。<私>はそこから言語ゲーム規則^[2]を<私>と他者の振舞いのパターンから深層学習する。
- ②ここで示す深層学習とは、<私>と他者のそれぞれのテキストの振舞いのパターンから、論理的な普遍、

一般、に代わる規則、すなわち振舞いの群れが映し出す幻想を作り出す装置であり、言い換えれば、言語ゲームの局所的相対的な強度^[6]の計算である。

- ③その装置は、〈私〉と他者のそれぞれに『離見の見^[4]』に現れるテキストのパターン間の強度の類似を計算する。すなわちテキストの集まり（時空のスナップショット^[7]）の間の相互作用の強度を類似計算する事によって、家族的類似という局所的かつ相対的に作用するテキストの群れを形成する。
- ④〈仮面^[5]〉とは、『離見の見』を計算する事によって得られる『〈私〉と他者の振舞いから産出された、〈私〉のテキストの集まり』である。
- ⑤この様に記述された世界は、ウィトゲンシュタインの言う“世界の限界”である。
- ⑥そこで世阿弥の『離見の見』をアスペクトゲーム^[2]として言語ゲームに反映させ、局所的相対的なテキストの振舞いの群れの言語ゲームを計算し、『〈私〉のテキストの変動するパターン』として世界を表現する。
- ⑦『離見の見』という〈私〉のアスペクトゲームは、他者との振舞いのパターン交換によって多元的な言語ゲームが実践され、〈私〉は他者の意図を推測する。この構図は他者が見る私という構図において類似である。そして類似の「強度」は互いに局所的なパターンに現れる。パターンの類似強度は自律分散的に計算され、パターンを集める simulation が実行される。この過程を『言語ゲーム的群知能』と呼ぶ事にする。
- ⑧『言語ゲーム的群知能』で表現された世界はすなわち、世界の存在条件として、もはや普遍量化が意味を持たない事が示される。
- ⑨局所的なテキストの集まりにおいて論理学が適用可能な場合、局所的に閉じたセキュリティ・モデルが成立し得る。
- ⑩総じてクラウドの設計概念は「客観的規則が絶対的真理である」という誤解（意味盲）に基づいている。パターンランゲージはその誤解を元凶とする世界の不都合や争いを、それは意味盲であると〈私〉たちに気付かせる装置である。



Fig.2 パターンランゲージのイメージ

4. むすび

パターンランゲージで示されるテキストの群れの行く先は、プラトンからフッサールに至る哲学が示す真理として収束に向かうものではなく、言語システムとしてそれ自体が増殖するが故に“ノイラートの船のメタファー^[8]”であり、故に、〈私〉たちは今ここを孤独に生きるしかない。しかし〈私〉たちは“ただ生きるのではなく善く生きる”ための一つの方法として『離見の見』という他者性と共にノイラートの船に乗り込むという道がある、と私は考える。

文献

- [1] 野矢茂樹、“規則とアスペクト：『哲学探究』第II部からの展開”、北海道大学文学部紀要、pp.95-135、1988。
- [2] ウィトゲンシュタイン、“ウィトゲンシュタイン全集8、哲学探究”、大修館書店。
- [3] ウィトゲンシュタイン(著)、野矢茂樹(訳)、“論理哲学論考”、岩波文庫、2003。
- [4] 鈴木文孝、“世阿弥の離見の見”、愛知教育大学研究報告 28(人文科学編)、pp.133-146、1979。
- [5] 坂部恵、“仮面の解釈学”、東京大学出版会、2009。
- [6] ドゥルーズ、バルネ、“ディアローグ”、河出文庫、2011。
- [7] 中村昇、“ベルクソン、時間と空間の哲学”、講談社選書メチエ、2014。
- [8] 野家啓一、“科学の解釈学”、講談社学術文庫、2013。



戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「用語編」その4

原田 広 (非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

前号『ニューズレター』No.35 (連載第3回) では、第一次近衛内閣が「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」の三つのスローガンを掲げ国民精神総動員運動を展開した1937年前後から、東条内閣における1942年翼賛選挙に至る我が国の〔国内社会：政治・外交〕を表現する用語について、紙芝居脚本における具体的な使用例を紹介した。取り上げたのは、ほぼ年次順に、〈高度国防国家〉〈総力戦〉〈総動員〉〈新体制〉〈大政翼賛(会)〉《近衛文麿》《外交三原則》〈東条英機〉〈翼賛選挙〉といった時事的用語に加え、この時代を通しての共通語ともいえるべき〈国難〉などであった。

今号以降、これを受けて、戦時体制下の国内社会・国民生活—いわゆる「銃後」の姿が如何に描かれているかを、紙芝居脚本に沿って紹介する。本稿の用語分類では、〔国内社会〕の〔17/生産・食料・資源、18/交通・通信、メディア、19/教育、20/銃後生活、後援団体、21/動員・奉仕・生活改善、22/標語、23/防諜、防空〕の七つの括りを対象とするが、行文の展開を考慮し、銃後社会の精神的様相を現在に伝えるであろう〔22/標語〕を最初に取り上げることとした。

〔22/国内社会：標語〕

戦時下の標語といえば、官制の「ぜいたくは敵だ!」「産めよ殖やせよ国のため」、公募作品といわれる「欲しがりません勝つまでは」などのキャッチコピーが想起されるが、ここには(それら出自が明確なものを含め)、国民精神を戦争に向けて動員するための社会的キャンペーンによって肥大化した〔標語〕的仮象を纏う用語類をまとめて採録した。採録件数は下記の全39件であり、各用語に付した数字は紙芝居脚本への出現回数を示している。

御奉公 26、一億一心 10、贅沢(は敵だ)、浪費 8、隠忍(自重)、堪忍袋、忍苦 7、一億国民(民一億) 6、時局(の認識) 6、非常時 5、愛国行進曲 4、火の玉 4、旧体制(自由主義、個人主義、唯物主義)、旧秩序 4、一致協力(団結)(協力一致) 3、挙国(一致) 3、撃ちてしまむ 3、持場持場 3、決戦体制(下) 2、公益優先 2、国賊 2、時節柄 2、滅私奉公 2、決戦の歌・進め一億火の玉だ 1、一億の手 1、一億の楠公 1、一億の鉢巻 1、一死奉公 1、一票報国 1、臥薪嘗胆 1、私生活 1、常在戦場 1、成金 1、産めよ殖やせよ 1、戦争生活 1、大政

翼賛の歌 1、独身主義 1、売国奴 1、非国民 1、必勝撃滅 1、亡国の民 1、利己主義 1、率先挺身 1

これらの用語が帯びている〔標語〕的目的を共約すると、おおよそ次のように分類することができる。以下、基本的にはこの番号順に用語の特性と使用例を見ていきたい。

- ① 戦争相手国の敵性を表す用語：
旧体制(自由主義、個人主義、唯物主義)、旧秩序、撃ちてしまむ、必勝撃滅
- ② 戦時的現在の特殊性を表す用語：
時局(の認識)、非常時、時節柄、決戦体制(下)、常在戦場、戦争生活
- ③ 国民精神総動員運動の基本精神「尽忠報国」を平易に表す用語：
御奉公、持場持場、公益優先、滅私奉公、一死奉公、率先挺身
- ④ 同じく「挙国一致」を端的に表す四文字用語：
一億一心、一億国民(民一億)、火の玉、一致協力(団結)(協力一致)、挙国(一致)、一億の手、一億の楠公、一億の鉢巻、一票報国
- ⑤ 同じく「堅忍持久」からの派生的用語：
贅沢(は敵だ)、浪費、隠忍(自重)、堪忍袋、忍苦、臥薪嘗胆
- ⑥ 自国民の敵性を表す用語：
国賊、売国奴、非国民、亡国の民、成金、私生活、産めよ殖やせよ、独身主義、利己主義
- ⑦ 精動下の流行歌：
決戦の歌・進め一億火の玉だ、愛国行進曲、大政翼賛の歌

① 《旧体制(自由主義、個人主義、唯物主義)》《旧秩序》《撃ちてしまむ》《必勝撃滅》：

一番目に取り上げるのは、「戦争相手国の敵性」を表す用語である。既に本稿連載第1回目の〔03/国際関係：非枢軸国〕で紙芝居における敵国(鬼畜米英)の描かれ方を紹介し、第3回目の冒頭に英米的自由主義・ソビエト社会主義・独伊のファッショ・ナチス運動への対抗軸として日本が東亜新秩序を掲げる思想的背景について言及したが、ここでは、そうした敵性思想(視)が、国民精神総動員—大政翼賛会運動をとおして、メディアとしての同時代性をもって紙芝居作品のなかに表れてくる

象徴的用語（標語）の用例を紹介したい。

庶民的媒体として街頭紙芝居の前史をもつ国策紙芝居製作者にとって、社会的に流通する政治的・思想的言語を庶民的・日常的な生活言語にどのように翻訳していくかということは、創作上のひとつの課題であったと推測される。前号でも指摘したように、この点を意に介さない脚本も多々あるが、報道性・ドキュメント性を目的とした作品ではそれが程度通用するとしても、物語性をもった作品では生の政治的・思想的言語の使用が作品の質を破綻させる場合があるからである。そこにおいて、国民精神総動員一大政翼賛会運動において展開された「国策標語」募集に、団体・地方組織をとおして集められた国民的言葉は、公式言語と生活言語を媒介するうえで大きな役割を果たしたであろうし、紙芝居集団にとっても脚本（言語的用例）の基盤ないし資源と捉えることができるものであったと考えられる。

以下に紹介する《旧体制》《旧秩序》は、いわゆる定型標語ではなく、紙芝居脚本において敵性思想を集約的に表現する用語であった。

本稿のなかで何度か登場する『滅私奉公：娯楽用』1941.6の「ぜいたくだぞ、蒲焼で一杯やろうなんて寸法は、旧体制だ、そりゃな」は、町内会の常会で聞きかじってきたばかりの言葉を取って未消化のまま、江戸庶民ことばのなかに取り入れることによって、脚本としてはある意味で成功した事例である。『少年團』1942.1「少年団が生まれたわけを説明する先生）試験の時に友達同士で隠しあい疑いあい運動会で競いあい・・・つまり難しい言葉で言えば自由主義の世の中だったのです」は、この世代が固有にもつ競争意識までも敵性自由主義の表れに拡張しようとした無理加減を示しているだろう。『産業報國』1941.10「我等は今、世界新秩序の完成という肇国の大理想・大使命実現の為、旧秩序を維持せんとする荒波と血みどろの戦いをしているのだ」は、産報運動の号令として、また『臣民の道』1941.12「世界史は今大きく動いています、個人主義、自由主義、唯物主義などに災いされていた今迄の世界が忽ちに崩れ始め・・・新しい秩序の建設が刻々進行しています」は、相手なき臣道実践の唱導ことばとして、公式言語がそのまま使用された事例である。これらに見られるように、《旧体制》《旧秩序》とは、西洋的自由主義・個人主義・唯物主義に立った打破すべき国家体制の別名であり、大東亜共栄圏によって世界の新秩序を樹立せんとする日本がそれに取って替わるべき過去のもの（＝日本は新しい）とされるが、紙芝居脚本用語として独自の結晶化を果たしたものとまではいえない。

《撃ちてし止まむ》（打ちてし止まん）は、陸軍省新聞部の1942年募集標語に『古事記』にある神武天皇の東征歌の末尾を転用したものであり、1943年3月10日の第38回陸軍記念日に向けて、国民の戦意高揚キャンペーンとして、画家・宮本三郎のポスター5万枚を配布したこと

から、もっとも有名になった標語のひとつである。この類語となる《必勝撃滅》とともに、紙芝居の用例を紹介する。



図1 宣戦

『宣戦』1942.12「日本は・・・アジアを貪欲の鉄鎖から解放する。打ちてし止まんの烈々の意気をもって忍びて甲斐あるこの苦難をにっこり笑ってうけもとう」は、上記の陸軍省ポスター配布より約3ヵ月月前（奥付：1942.12.12）に発行された作品であり、著者・出版社は「大政翼賛会宣伝部」である。あえて「打ちてし止まん」と表記していることに、陸軍公式発表前であることへの大政翼賛会側の“配慮”を見るべきなのか、あるいは無関係なのかは不明である。この後、標語と同名タイトルの『撃ちてし止まむ』1943.3「（宣戦布告）征戦の本義をつかみ撃ちてし止まむ・・・二千六百有余年星は移り世は変わっても撃ちてし止まむ、烈々の気魄は今も変わらず」が出されるが、これは「陸軍省報道部委嘱作品」の表記があるとおりに、陸軍省とのタイアップによって、上記の陸軍記念日と同日（奥付：1943.3.10）に、日本教育紙芝居協会の発行団体・日本教育画劇から刊行された作品である（著者は、日本教育紙芝居協会脚本・小谷野半二絵画）。さらに、『初陣』1944.4「今日の忠通は鎧兜の代わりに飛行機飛行帽をつけ・・・みな等しく撃ちてし止まむの意気に燃えたっています」には、「戦意高揚画劇」指導：大政翼賛会」の表記があり、こうしたところに、陸軍省一大政翼賛会—日本教育紙芝居協会—出版社の短期間のうちに確立した緊密な連携ぶりをうかがうことができるだろう。《撃ちてし止まむ》は、「撃たずば止まじ」すなわち敵を殲滅するまでは戦いを止めないとの決意を表したもので、その後、多くの紙面・宣伝のコピーとして使用されるが、これを戦意高揚プロパガンダ・ポスターとして陸軍省が配布したのは、ガダルカナル島からの転進（1943年2月9日大本営発表）のほぼ一ヵ月後のことであった。関連用語として挙げたもう一作は、『大事到来』1942.1「義勇奉公の誠心火と燃え上がり必勝撃滅の意気正に天を衝く」であるが、この用語は当時「米英撃滅必勝信念昂揚」などとも使用されているようである。

② 〈時局（の認識）〉〈非常時〉《時節柄》《決戦体制（下）》
《常在戦場》《戦争生活》：



二番目に、戦時下の現在（いま）の特殊性を切り取ることによって、国民的な危機意識の共有・団結の必要を喚起する意味合いで使用された用語を紹介する。既に『ニューズレター』前号において、日本人が外敵に直面したときの危機を受け止める姿勢として〈国難〉の用語があることを紹介したが、ここに採録したものは、大上段の国難（歴史的・運命的な危機）を生活次元に降下させ、標語的符牒として一般的に使われたであろう用語群である。

〈時局〉とは、「特殊な危機に見舞われている説明の必要ない現在」というほどの意味であり、それに気づいていない者は〈時局の認識〉が不足しているとされる。—『スパイ御用心』1941.12「ウカウカと時局も認識せずに享楽や贅沢に耽っている時ではない」、『總意の進軍』1942.3「(東条首相の新聞記事) 今回の選挙をもって支那事变以来・・飛躍的に発展を遂げた時局の新段階に対応すべく清新なる議会の成立を期待するに他ならない」、『はだか談義』1943.11「(銭湯の主人) この決戦下に見ればいい齢をして・・子供じゃあるまいし、お湯屋の中でドラ声張り上げたりして時局の認識が不足とる」、『雛鷺の母』1944.11「(米英との戦争が起きそうな雲行きになり) 老人はこの重大時局に死んでもいらねえわいと…」などである。『炭焼く妻』1942.1「(村長) いま決戦体制の日本に未だこんな奴がいるかと思うと我が村の恥辱」もほぼ同様の意味である。本コレクション中唯一の戦後作品『新生』19--では「(汽車の中。万事、星と錨と闇と顔だった) 時局に便乗してそれを助長させた国民も悪いんですよ」と、〈時局〉に対する批判的意味が込められる。



図2 スパイご用心

これに対して〈非常時〉は、〈時局〉を鉛筆に例えたときの芯に相当するといえようか。—『母さん部隊長』1939.4「(町内会で忙しい母) みんな呑気なことばかり、非常時ですよ本当に」、『滅私奉公：娯楽用』1941.6「(熊さんと八公) 何だい・・この非常時に朝っぱらから何をボヤボヤしてやあんだ」、『老將軍の放送』1941.8「非常時日本の若い者がバスがないからと言って、たった二里八キロばかりを歩かないでどうします」、『一票を護る』1941.8「(金力や暴力に敗けた者がある) しかしこの超非常時下、粛清選挙の今日そんな弱い者があるとは考えたくない」、『閻魔の廳』1944.12「(閻魔)

女—この非常時に我が家のことより考えず何でもかんでもと買いためる・・下司女は豚にして地獄の残飯を当てがってくれようぞ」のように、説明の必要ない〈時局〉が、この〈非常時〉として削り出されるのである。『山本五十六元帥』1943.12に主人公直筆の書として壁に飾られた色紙「常在戦場—常に戦場にある心で一生を貫いた元帥」、あるいは、『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12の「私たちは弛まず倦まず今戦争生活を旗印としてガッチリと腕を組んで進んでいる」は、〈非常時〉の心構えを説くものである。



図3 閻魔の庁

もうひとつ類義語として、『時節柄』がある。—『妻は戦ふ』1941.10「(忙しい妻が屑屋さんから玄関に呼び出されて) 時節柄時間つぶしじゃないの、今日はあっても売りませんよ」、『炭焼く妻』1942.1「(飲み屋の貼紙) 時節柄につき御酒は御一人二本に願います」などであるが、これは時機や縁起をうかがう「御日柄」の語感に切迫した「時局」を結合させ、女性言葉による社会的接触の意味合い（昨今で言えば「今時（いまどき）」に相当するニュアンス）を持たされているように思われる。

これら〈時局〉〈非常時〉《時節柄》といった用語は、特別な典拠をもつ言葉ではないが、場所や性による微細な使い分けを好む日本人にとって、生活場面における〈国難〉に近い「標語性」をもった戦時用語でもあった。

③ 〈御奉公〉《持場持場》《公益優先》《滅私奉公》《一死奉公》《率先挺身》：

次に、紙芝居脚本中の頻出語のひとつでもある〈御奉公〉を取り上げる。これは、日中戦争の長期化にともなう総動員体制への精神的・人的・物的動員の実践単位であった個人・団体・町内会に対して「自主性」「自発性」を要請するために使用された用語であった。国民精神総動員の基本精神のひとつ「尽忠報国」が、戦時下社会の平場において「国への御奉公」という比較的平易な日常語に移しつつ、戦時下の標語との対応関係を保っていたものと捉えることができる用語である。

「尽忠報国」は、中国の史書『北史』列伝を出典とした、文字通り“君主や国家に忠義・忠誠を尽くし、国の恩に報いる”の意を有する言葉であり、我が国において

は北畠親房『神皇正統記』（「凡そ王土にはらまれて忠をいたし命を捨つるは人臣の道なり」）に始まり、尊王攘夷思想と尽忠報国の精神を結び付けた近世の水戸学思想家に好んで使用されてきた。公式文書では、慶応3年12月9日（1868年1月3日）王政復古の大号令の末尾に「旧来驕惰之汚習ヲ洗ヒ、尽忠報国之誠ヲ以奉公致ス可ク候事」の使用例が見られ、本稿の基礎データとしても、より古典的な始原をもつ皇道思想を表現する用語として『国体明徴』の分類に採録している。これが昭和戦前期の学校教育関連文書において、「（修練科目は）行的修練ヲ中心トシテ教育ヲ実践的総合的ニ発展セシメ教科ト併セ一体トシテ尽忠報国ノ精神ヲ発揚シ献身奉公ノ実践力ヲ函養スル」（1937年3月27日中学校教授要目、高等女学校および実科高等女学校教授要目の改正）の用例が見られるようになる。これは当時の国体明徴運動・教学刷新運動を背景とした教育令の改正であり、この時期に「尽忠報国」の用語があらためて公式文書に呼び込まれたことがうかがわれよう。統一国家の君主に対する尊敬をとおして民心の統一を図る「尽忠報国」思想は、太平洋戦争の激化とともに、1943年12月10日閣議決定『戦時国民思想確立ニ関スル文教措置要綱』の「第一 方針 国民思想ヲ国策遂行ニ凝集セシメ戦力増強ヲ阻碍スル一切ノ思想的原因ヲ根絶シテ必勝ノ信念尽忠報国精神ノ昂揚、戦時国民道義ノ確立ヲ図ル為全面的ニ教学ノ刷新振作ヲ行フト共ニ国民ノ思想指導ヲ強力ニ実施スルモノトス」、さらには1945年5月22日勅令第320号『戦時教育令』の「第一条 学徒ハ尽忠以テ国運ヲ双肩ニ担ヒ戦時ニ緊切ナル要務ニ挺身シ平素鍛錬セル教育ノ成果ヲ遺憾ナク發揮スルト共ニ智能ノ錬磨ニカムルヲ以テ本分トスベシ」などのように、戦時国家体制の中核的理念となっていく。多くの四文字熟語を造語・駆使した福沢諭吉の「報国尽忠の主義」（公德教育における報国心）が近衛内閣の国民精神総動員運動の標語となった可能性を示唆する学者も存在する。



図4 国體の本義

しかし、「尽忠報国」という硬質の四文字熟語が、よりポピュラリティをもった国家への〈御奉公〉へ転化していく過程に大きく与ったのは、日中戦争の2ヵ月前に出された『国體の本義』、日米開戦の5ヵ月前に出された『臣民の道』（『本義』の注解篇・姉妹篇とも言われ

る）であろう。—「臣民の道は、皇孫瓊瓊杵ノ尊の降臨し給へる当時、多くの神々が奉仕せられた精神をそのまゝに、億兆心を一にして天皇に仕へ奉るところにある。即ち我等は、生まれながらにして天皇に奉仕し、皇国の道を行ずるものであつて、我等臣民のかゝる本質を有することは、全く自然に出づるのである」（『国體の本義』三、臣節）。「萬民愛撫の皇化の下に億兆心を一にして天皇にまつろひ奉る、これ皇國臣民の本質である。天皇へ隨順奉仕するこの道が臣民の道である。（略）皇國臣民の生活は各々その分に生き、その分を通じて常に國家奉仕のまことを致し、皇運を扶翼し奉ることを根本精神とする。この精神に立脚して不斷の修練を重ねるところに、臣民の道が成ぜられるのである」（『臣民の道』第三章一、皇國臣民としての修練）。独特のうねるような文体中に「天皇／国家への奉仕」が反復され、それは「日本国民が生まれながらにもつ根本精神」であり、これに立脚したさらなる修練を求めるという構成をもつ両文書は、「国體」観念の実践的比重に違いを見せながらも、国民精神総動員運動・大政翼賛会運動における精神教化のテキストとして使用され、多数の注解書まで生み出している。以下、紙芝居作品の用例を紹介する。

「（老人）戦場に死んで国の礎になるのも御奉公なら、生きて国家のお役に立つべく余生を捧げるのも一つの御奉公」（『胸の中の歌』1941.8）、「（妹に）なにも満州に行くばかりがご奉公じゃないと思う」（『母は泣かず』1944.12）、「（先生）一兵士、一職工、一將軍、一大臣でもみな同じように国に仕える立派な一本道です」（『雛鷺の母』1944.11）などは、奉仕対象や場面を特定しない用例であり、歴史もの紙芝居では〈ご奉公の誠〉と精神性がより強調される。しかし、〈御奉公〉の標語的万能性は、以下のように、あらゆる社会活動に冠され、自在に通用させられていくところにある。



図5 軍神の母

- 人的奉公としての「出征」：「海軍軍人となって御奉公したい」（『軍神の母』1942.6）、「（宣戦の詔勅を聞く父、息子に）いよいよご奉公の時が来たぞ」（『軍神岩佐中佐』1943.6）
- 総動員運動における「貯蓄報国」：「債権の消化は銃後の第一の御奉公」（『神様の配給』1943.3）、「（班長）婦人のできる重大な御奉公、勝ち抜くための貯



金」(『妻』1943.7)

- 総動員運動における「増産」「労働報国」:「(鎮守様の前で声を揃え)一同は食糧増産を目指して邁進、ご奉公の誠を致さんことを神前に於いて謹んで誓うものであります」(『みのる秋』1941.11)、「(老人)いまは決戦の時だ、老いも若いも一所懸命働いてご奉公しなければならぬ時だ」(『踏切番と子供達』1943.10)
- 家庭・地域における「節約」「防空」:「頭を働かして何一つ無駄を出さないようにする、それが台所をやるものの御奉公じゃないか」(『戦時お臺所設計圖』1942.8)、「ハイで始まるご奉公、子供にできるご奉公、みんなお母さんの言いつけを守り、兎さんのように素早く防空壕に入ります(原文カタカナ)」(『ナカヨシバクウゴウ』1944.2)
- 子どもの「健康」「教育」:「身体を丈夫にする事は誰にでもできる国への御奉公」(『ネ坊ノカンチャン』1941.12)、「(母)東京の学校へ行くのはお国への御奉公」(『櫛』1943.4)。

このように、個人の生死(兵士)から、生活の糧(労働)、家庭・地域の営為(健康、教育、節約)に至るまであらゆる日常的活動が、国への〈御奉公〉に一元化されることによって、社会的には(隣組の相互監視も手伝い)判断停止的な麻酔効果を及ぼし、総動員運動やマスメディアをとおして、私的利益を排した公益優先の心理的・感情的態度を国民的規模で求める抵抗不能の万能標語として流通していったと考えられるのである。

以下には、〈御奉公〉に準じる「公的奉公」の標語性を帯びた用語とその使用例を挙げる。

「(工場で倉庫で)持場持場を固く守り放火、爆破を警戒する」(『防諜戦士』1942.6)、「(長期戦)今からバンザイバンザイで持場職場をおっぼり出して浮き上がっている、これからどうしてこの戦いに勝てましょう」(『進め一億、火の玉父さん』1942.2)は、前掲『臣民の道』で強調される天皇のもとに平等な皇国臣民の「その所」(職業や地位)、「各々その分に生き、その分を通じ」た国家奉仕の貫徹である。「職分奉公、公益優先、職場もやはり戦場だ。第一線の勇士の心をそのまま職場に生かせばよい」(『産業報国』1941.10)、「自分の儲けを二の次にしてまず国の利益公の利益をはかる、すなはち公益優先ということは実際に当たってはよほど決心のいることです」(『大政翼賛』1940.12)には、個人的特技や企業利益を公益のもとに服させようとする国家総動員運動の統制思想の浸透が見られる。「俺だって知ってるぞ、アノホラ滅私奉公ネ、臣道実践、銭湯は七銭」(『滅私奉公：娯楽用』1941.6)と、「(真珠湾攻撃)その犠牲となられた九柱の軍神!!実には滅私奉公の化身ではありますが(その陰には軍神を育てた母が)」(『小楠公の母』1943.3)は、自己犠牲を求める標語の対照的な用例となっているだろう。太平洋戦争後半になると、

「戦争だ!戦争以外には一切を棄てよ、如何なる困苦欠乏にも耐え一死奉公の覚悟と必勝の信念をもって」(『我は何をなすべきか』1944.10)と観念右翼的な日本精神を喚起する用語が再現され、あるいは「(服務規律第二条)応徴士は率先挺身、他の模範となりその信望を一身に聚むる如き行動をしなければ」(『進水式』19--)のように、1943年7月の国民徴用令改正にともなって制定された応徴士服務規律(厚生省令)の一部が引用される。応徴士とは、国の要請にもとづく産業応召者のうち管理工場または指定工場において総動員業務に従事する者のことであるが、紙芝居作品中「(服務規律第二条)」とあるところは「第三条」の誤りであろうと思われる。全10条からなる服務規律は「職場の戦陣訓」といわれ、応徴士用の徽章も制定されたという。



図6 滅私奉公

- ④ 〈一億一心〉〈一億国民(民一億)〉《火の玉》《一億の手》《一億の楠公》《一億の鉢巻》《一票報国》《一致協力(団結)(協力一致)》《拳国(一致)》:

続けて、同じく国民精神総動員運動の標語という観点から、その基本精神のひとつ「拳国一致」を端的に表す“一億の変奏”とでもいうべき用語を取り上げる。ここでいう「一億」が“日本国民”全体の結集を数値で表すものであることはいうまでもなく、それは、内地人口に日本統治下の朝鮮・台湾・樺太・関東州・南方委任統治および在外邦人を合わせた数字(内閣統計局「昭和十二年十二月一日現在推計人口」)を指していたものと考えられる。しかし、1934年10月『国防の本義』(陸軍パンフ)には、「人口は今や日本内地にのみで六千五百万、全国で九千二百万、満洲国と共同防衛の場合を考ふれば一億二千万に達し、米蘇に匹敵する堂々たる世界の大国である」の記述があるように、朝鮮・台湾等は当然のように「全国」に含み、しかも傀儡国家・満洲を含めて国防(共同防衛)における人的要素を指す場合があったことにも留意しておきたい。これらの地域において行われた種々の皇民化政策と密接に関係しているからである。

また、ここに採録した「一億」あるいは「拳国」を冠した諸用語が先の国民精神教化テキストにほぼ見当たらないことも指摘しなければならない。「一億」は『国体の本義』には登場せず、『臣民の道』末尾一カ所に「一億国民」として表れるのみである。「拳国」は『本義』

では「国の始原」の意味で、『臣民』では主に過去の歴史における「一致協力体制」の意味で使用され、同じ国民精神総動員の標語でも「尽忠報国」（御奉公）とは別系統の起源や定着過程をもつものではないかという推測を呼び起こす。この点については、近衛首相就任のラジオ放送・大命を拝して（1940年7月23日）に「大御心を仰いで一億一心、真実の御奉公を期さねばならぬ」と、また日独伊三国同盟発表（1940年9月28日）に「実にわが国は今や一億一心、否一億が真に一心となつても、猶ほ足らざる環境に置かれてゐるのであります」とあることなどから近衛首相に始まるとの説もあり、これは本用語を収録する紙芝居の刊行年月が1940年11月以降であることとも符合する。〈一億一心〉が近衛演説に由来するとすれば、巧まざるスローガンメーカーとしての資質（教養）を有したインテリ宰相の姿をここにも見るべきだろうか。



図7 帝国ニッポン標語集

しかし、「戦時国策スローガン・全記録」のサブタイトルをもつ森川方達編著『帝国ニッポン標語集』（現代書館1989.8.15）によれば、1922年「万世一系億兆一心」（内務省。カッコ内は募集团体、以下同じ）を嚆矢に、1935年「九千万人一列行進」「心の動員九千万」（報知新聞社）と日本人人口を組み込む標語が出現し、1937年には「一億の心に染めよ日章旗」（広島県）「一億日本心の動員」（東京標語研究会）「一億の心を楯に征け戦士」（懸賞界）と、“一億の人口と日本人の心”を組み合わせた標語の定着現象が明確に見られる。そして同じ年に、その完成形ともいふべき〈一億一心〉の標語が「一億一心銃とる心」（和歌山県）として記録されていることから、近衛始原説よりもむしろ、国民待望の青年宰相の政治声明のなかに使用されたことによって決定的に広く浸透したものと考えざるべきかもしれない。このほかの場合も近衛文麿の諸言説には、文部教学系よりも極右イデオロギストの思想混入の可能性を考慮に入れるべきであろうが、〈一億一心〉を演説に使用した近衛の趣旨は「この国民組織の目標は、国家国民の総力を集結し、一億同胞をして生きた一体として等しく大政翼賛の臣道を完うせしむるにある」（1940.9.4新体制準備会第一回総会近衛声明）というところにあり、大政翼賛会運動規約第二条「本運動は万民翼賛、一億一心、職分奉公の

国民組織を確立し、その運用を円滑ならしめ、もって臣道実践体制の実現を期するをもつて目的とす」（赤木須留喜『近衛新体制と大政翼賛会』岩波書店、1984.1.13 p 340）として漸く具現化する。いずれにせよ、このような日本国民に「一億」を冠する標語の戦争下における発生と拡散は、ジョン・ダワーが指摘するとおり、「日本人の犠牲的行為の勧めがまず『一億』という常套語に込められた絶対的な連帯感」（『容赦なき戦争』p 366）一すなわち「拳国一致」の精神を端的に表すものであったということができよう。

すべての用例を紹介する余裕がなく、実際には「国民を一（イチ）に束ねる」式の流行語的掛け声に墮したのも多いが、以下、関連用語を含めて紙芝居作品を紹介する。



図8 フクちゃん

〈一億一心〉では、「（戦争にはお金がいる）それには一億一心貯金してお国のためお役にたたなければ」（『フクチャントチョコキン』1940.11）が唯一の貯蓄報国ものである。これ以外は、国民の心構えを国防国家、大東亜建設、大政翼賛、国難に結びつけるためのいわば「省略的記号」として登場する。—『大政翼賛』1940.12「（国防国家、大東亜）日本人が一億一心打って一丸となって全力をあげてぶつかるのでなければ果たすことのできない大使命」、『安樂傳授所』1941.7「（日本人の道）大政翼賛も一億一心も自分の気持ちを変えることから」、『常會の手引』1941.8「（日本の運命の決まるとき）一億一心日本人としての本当の自覚をいやが上にもはっきりさせて一杯の高度国防国家を打ちたて」、『撃ちてし止まむ』1943.3「今や有史以来の国難に当たり一億一心有難き聖慮を奉戴し聖戦の本義を掴み撃ちてし止まむ」などである。

〈一億国民〉になると、やや公式化された、標語性・号令性の希薄な普通名詞となる。—『英東洋艦隊全滅す』1942.1「（開戦第一日、第三日の戦果の報せは）ワツと一億国民の歓呼巻き起こした」、『撃ちてし止まむ』1943.3「勝利は必ず我にあり。ただそのためには一億国民の一人一人が十の力を百にも使って増産、また増産です。この一年こそ大東亜戦争の山」。『はだか談義』1943.11「（犯罪の減少）日本の国が万邦無比であり一億国民が火の玉となって戦争に勝ち抜こうと緊張してい



る証拠」などである。『宣戦』1942.12「(開戦詔勅) 大いなる朝よ美しき朝よ、この時都に村に野に山に民一億の足音絶え、野に一鳥のさけびなく大詔昭々と四海に布くを聴くのみ」のように、〈一億国民〉を〈民一億〉と倒語することによって脚本の韻文効果・視覚的効果を上げる例も見られる。

「一億」を冠したのものとして、一人ひとりが「手」を取りあい、「鉢巻」を巻いて、中世南朝に忠義を尽くした武士「楠公」の決意で増産・貯蓄運動への奨励を求める《一億の手》《一億の鉢巻》《一億の楠公》も現れる。—「敵だ! 倒すぞ米英を」1942.12「戦場精神だ増産だ貯蓄だ、大東亜が一つになって日本中が火の玉になって、さあ誓おう、敵だ! 倒すぞ米英を、一億の手で団結で」、『神機いたる』1944.11「いざ一億の鉢巻だ、増産、食糧、貯蓄の増強に励もうではないか」、『一億楠公』1944.10「今こそ我々国民は一億の楠公ここにありの大信念をもって(増産)火の玉となって総突撃するのだ」などである。(なお、『一票を護る』1941.8の「(病気の父、かけがえのない一票無駄にはできない)一票報国の尊い精神が雄々しくも漲っている」は、本来「翼賛選挙」に採録すべきものであったと考える。)



図9 進め一億、火の玉父さん

このほか、総動員下の国民の士気高揚ぶりを表現する有名な標語として、大政翼賛会の公募になる「進め一億、火の玉だ」があり、これに由来する《火の玉》の用語は、上述の作品紹介のなかに含めた。1942.2刊行の紙芝居『進め一億、火の玉父さん』のなかに、日米開戦当日のニュース間奏曲として流され流行歌となった同名の歌詞が描かれている。この時期には多くの戦意高揚を目的とした国民歌謡が創作されており、本稿【標語】として括った分類中に「愛国行進曲」「大政翼賛会の歌」を愛唱歌として採録したが、脚本素材としての使用例が大半であるため、前者は『銃後の力』1940.12、『ほがらか部隊記』1941.6、『ドウブツタイクワイ』1944.6、『ポンコン隊』1941.10に、後者は『明けゆく村』1942.2に登場することを記すにとどめたい。

また「一億」国民の一丸性(協力・団結ぶり)を示す《一致協力(団結)(協力一致)》《拳国(一致)》用語があるが、〈一億一心〉などに比して標語としての自立性は希薄である。—『家庭防空陣』1941.10「(我に備え

ありて憂いなし) 全国民が一致協力して時局乗り切りに邁進しようではありませんか」、『炭焼く妻』1942.1「(妻への手紙) 戦場では互いに真情をもって扶助の精神で一致団結して戦っている」、『我は何をなすべきか』1944.10「戦争だ! 戦争だ! 戦争以外には一切を捨てよ、全国民協力一致して全力を発揮するとき」、『總意の進軍』1942.3「(政府は大東亜戦争終局の目的完遂のため翼賛議会の確立を目指し) 官民一体の拳国一致運動を展開すべく(翼賛政治体制協議会を誕生せしめた)」、『上杉鷹山公』1942.10「この国力充実運動の実行には文字通り拳国一致して当たった」などである。

⑤ 〈贅沢は敵だ、浪費〉〈隠忍自重、堪忍袋、忍苦〉《臥薪嘗胆》:

および

⑥ 《国賊》《売国奴》《非国民》《亡国の民》《成金》《私生活》《産めよ殖やせよ》《独身主義》《利己主義》:

最後に、国民精神総動員の基本精神「堅忍持久」に相当する用語とともに、これに違背する「自国民の敵性」を表す用語を併せて取り上げる。ここで一言断らなければならぬのは、戦時下の〔国内生活〕に括った用語をあらためて再現してみたところ、実は他の分類に属させるべきものがあつたことである。戦時の窮乏生活を示すものと考えた〈隠忍自重、堪忍袋、忍苦〉は日中戦争から日米開戦に至る米英の圧力に対する我が国の姿を表し、また《臥薪嘗胆》は民を思う武家の心境を語るものであつた。戦時の公益優先への背馳と考えた《私生活》は個人生活も臣道実践という日本精神の強調であり、《利己主義》は翼賛選挙において排除すべき思想傾向を指すものであつた。そのため、以下の紙芝居作品の用例紹介では、これらを除くこととする。

第一次近衛内閣が、高度国防国家(総動員体制)の構築を目指して「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定したのは1937年8月24日である。本実施要綱にもとづき、精神総動員強調週間(1937年10月)、国民精神作興週間(同11月)、拳国精神強調週間運動(1938年2月)、愛国公債購入運動(1938年2月)、貯蓄報国強調週間(同6月)などの強化運動が展開され、1939年9月になると、一汁一菜の食事や日の丸弁当が奨励され、9月1日からは毎月1日の興亜奉公日に、神社参拝や勤労奉仕、料亭・娯楽場の休業が実施された。支那事变3周年に当たる1940年7月には「七・七禁令」と呼ばれた奢侈品等製造販売制限規則が出され、「贅沢は敵だ・華美な服装はやめましょう・パーマや指環はやめましょう」などの贅沢や過飾を戒める国民精神総動員運動の標語が流行する。

紙芝居作品においても、〈贅沢〉禁止、〈浪費〉排斥の言葉が躍る。

本コレクション中の最も早い用例は1939年前半であり、「近々娘を嫁がせませんがぜいたくな花嫁衣裳など

はだんぜん作らないことにきめました」(『母さん部隊長』1939.4)の婚姻儀式自粛である。これに続く紙芝居作品との間に一年近くの空白があるのは、近衛二次内閣の新体制運動が1940年秋の大政翼賛会発足(国民精神総動員運動の吸収)に帰結するまでの政治過程を物語るものであろうか。—『大政翼賛』1940.12「大勢の人たちが苦しんでいるのを見ながら平気でぜいたくする者は敵だ、もとは当たり前のことであっても今はそうはいかん、ぜいたくはぜいたくだ」では、作品全体で大政翼賛運動の臣道実践(発会式における近衛の挨拶)を強調している。1941年になると、『産業報国』1941.10「金に不自由がないからとて贅沢三昧。国を挙げてのるかそるか。の決戦に・・・私利私欲を貪る者は亡国の民だ、かかる者この国家の敵だ」と産業報国運動にからめるもの、また『尊き一銭』1941.12「一日二十銭の日掛貯金が決まったからには、これまで浪費(むだづかい)の多かった各自の家の生活(くらし)にも追い追いきちんとした秩序ができることでしょう」と貯蓄報国運動にからめるもの、『スパイ御用心』1941.12「享楽や贅沢に耽っているときではない。スパイに利用されて売国奴になるもの、みな無自覚からこんなことに」のように防諜ものの中に〈贅沢〉による気のゆるみを戒める作品が現れる。子供向けの動物が描かれる『ポンコン隊』1941.10では、「(老人が狐に向かって)お前たちの仲間が殖えたのも毛皮を首に巻いてシャナリシャナリと歩くような不心得な人間がいなくなったからだ。ゼイタクは敵だ!」といささか八つ当たりのセリフとなっており、また『ネ坊ノカンチャン』1941.12では「ねむいだのさむいだのってぜいたくです(今朝も元気いっぱいラジオ体操)」と経済的浪費と無関係な子供の生活規律引き締めとして使用される。



図10 ポンコン隊

国民的な〈贅沢、浪費〉排斥運動を乱すものが《亡国の民(国家の敵)》《売国奴》と呼ばれていることは、既に上掲作品に表れているが、これはさらに《非国民》となり、1943～1944年作品では《国賊》へとエスカレートする。—「(厳重な警戒態勢)その中でもし自分一人のことを考えて国民と苦楽を共にせず国民の守りを怠るものがあれば、道義上非国民と言われても申訳は立ちますまい」(『家庭防空陣』1941.10)。「(先生、黒板

に宿題「やみとりひきは止めませう」)闇取引は国内の政治経済の邪魔をし、ひいてはあの憎い米英に国を売ることになる。そんな人間は国賊です」(『明るい店』1943.12)。「我は何をなすべきか」1944.10においては、絵画面に「国賊だ!」の旗と複数の人物が描かれ、「石炭を掘らない資本家、闇に流し供出を怠る農民、一か月の生活費さえ得たら後は休んでもいいと怠けている産業戦士」の脚本と表裏となっている。一部経済的成功者への国民的反感が、大正期から存在したことは、「世は丁度第一次欧州大戦・・・世間では物凄い戦争景気、鉄だ船だと大小の成金が雨後の筍のように飛び出して」(『草鞋長者』1941.7)からもうかがわれる。しかし、狭義には、敵に母国の秘密を売る利敵行為を意味する《売国奴》、国家転覆を目論む反国家・反国体的な意味をもつ《国賊》、徴兵拒否・敵前逃亡など指す《非国民》といった最大級の敵性語が、国民精神総動員運動—大政翼賛会運動のなかで原義の差異を失い、国民の不満抑圧を代弁する言葉として一律に溶かし込まれていくことに、戦争という極限体制下における感性の磨滅を見ることができ



図11 我は何をなすべきか

もうひとつ紹介すべきは、戦時下の女性の役割に関する用語である。総力戦体制を維持するために、人口資源が重視され、国家総動員法の公布後、1941年1月22日に「人口政策確立要綱」が閣議決定された。本「要綱」は、当時約7000万の内地人口を「(20年後の)1960年に一億人とする」ことを目標に、その実現方策として「今後10年間に婚姻年齢を概ね3年早め、夫婦の出生数を5人とする」ことを掲げている。その具体的方策は「結婚の紹介、斡旋、指導」「費用の軽減、貸付」「20歳を超える女子の就業抑制」「学校制度との調整」「多子家族への優先配給、表彰」「人為的産児制限の禁止」「乳児死亡率の改善」など実に細部・多方面にわたるものであった。これを背景として、『産めよ殖やせよ』や『子宝報国』などの標語が生まれ、戦力となるべき子供を産まない《独身主義》もまた《非国民》視された。紙芝居作品にもその痕跡が見られるが、『仲よし貯金』1941.4の「(養鶏場)女手二人で生めよふやせよと一生懸命」は用語の単なるスリップに見えるし、『母さん部隊長』1939.4「(縁談を持ちこまる娘)だけどわたし一生独身主義なの。(母)まあばかなことをいうものじゃあり



ませんよ本当に」と軽く宥める程度の用例である。国民の体力を向上させることを目的として1938年1月11日には厚生省が創設され、人口政策もまたその重要な課題とされる。国民精神総動員運動では女性の活動が奨励され、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会、大日本連合女子青年団の四大官製団体は、国民精神総動員運動の主な推進力となった。大日本婦人会は1943年6月婦人総決起集会で「戦士を皇国に捧げませう、決戦生産に参加協力しませう、長袖を断ちませう」の申し合せをした（若桑みどり『戦争がつくる女性像』ちくま学芸文庫、2000.1.6、p 81）。しかし、この人口政策は、人口過剰を背景とした戦前の移民・殖民政策と基本的に矛盾していただけではなく、生む性としての女性への国家介入という全体主義国家特有の問題を孕むものであった。日本の人口が一億を超えるのは、1967年である。

以上、国民精神総動員一大政翼賛会運動がもたらした生活面・社会面に先立って、戦時下の国内社会の精神的様相を現在に伝える「標語」に沿って、紙芝居の用例を紹介した。

国民精神総動員一大政翼賛会運動のもとで創作された夥しい「標語」は、多くの場合、和歌・俳句・川柳といった伝統的な七五調の音律のなかに漢語による造語・新語を埋め込むことによって、国策同調的メッセージ（スローガン）をつくりあげ、それをとおしてある種自らの「社会参加」を実現しようとした国民感情の反映でもあった。地域・団体などの翼賛組織による総がかりの組織化が行われたとはいえ、国民側にこれに応える素地がないところでは運動自体が成立しなかったであろう。ここに採録した用語は、自立的な標語というよりも、こうした社会運動に共振しながら生み出された（あるいは普通の言葉から転用された）「標語的」用語であり、一部は典拠も明確でない言葉である。しかし、紙芝居脚本に使用されたこれらの感染性の高い国策用語は、新聞・雑誌・ラジオ・ニュース映画などの諸メディアをとおして国民の耳と目を支配し、総動員体制の大衆的地盤を基礎づけたのである。

しかしながらなお、本稿で見てきたものは、主に1937年国民精神総動員運動から1940年大政翼賛会運動の影響下にあった国策用語（その紙芝居脚本における用例）が中心であり、1941年10月18日から1944年7月22日まで続いた東条内閣の時代に入ると、より一層露骨な戦時用語として先鋭化していく。

たとえば、太平洋戦争開戦の2年後の文教措置『戦時国民思想確立ニ関スル文教措置要綱』（1943年12月10日閣議決定）は、「国民思想ヲ国策遂行ニ凝集セシメ戦力増強ヲ阻碍スル一切ノ思想的原因ヲ根絶シテ必勝ノ信念尽忠報国精神ノ昂揚、戦時国民道義ノ確立ヲ図ル為全面的ニ教学ノ刷新振作ヲ行フト共ニ国民ノ思想指

導ヲ強力ニ実施スルモノトス」を第一・方針をとし、第二・措置の各項で国民各層・教育宗教団体・企業管理者等に対して「必勝ノ信念」「皇国勤勞観」「戦時国民道義」「真ニ日本的ナル思想」「文化ノ根源」「我が国固有ノ家ノ本義」を求めていく。これらの〈言葉〉の一部は、本稿で何度か言及した1934年『国防の本義』、1937年『国体の本義』、1941年『臣民の道』に淵源をもつが、1943年4月山本元帥の撃墜死、5月アッツ島の玉砕、11月南太平洋マキン島・タラワ島の日本軍守備隊全滅という敗退局面を迎えていたこの時期の意思決定機関は、もはや軍政と軍令の統語性を失った指導部の姿を示しているように思われる。

東条内閣以降も、戦局に関する国民への世論指導は、「我ニ天祐神助アリ我ニ備ト地ノ利アルヲ以テ総テノ人的物的国力ヲ戦力化シテ一億協力大和魂ヲ以テ戦フ時ハ必ず敵ヲ破リ得ル所以ヲ解明ス」「外寇ニ対シ拳国総決起シテ戦ヘル結果ハ假令一時危局ニ直面スルモ必ず之ヲ突破セル歴史的事実ヲ示シ国民的確信ヲ強化ス」（1944年10月6日閣議決定『決戦与論指導方策要綱』）と、元寇神話・日本精神に運命を寄託している。そして遂には、1945年1月30日小磯内閣の閣議了解『大東亜戦争ノ現段階ニ即応スル与論指導方針』において、「本戦争ノ帰結ハ勝利カ然ラズンバ滅亡ナルコトヲ覚悟セシム」「国民ハ一億特攻体当リノ精神ヲ以テ各自職域ニ於テ敢闘」と、生か死かの局面を開閉するための「一億総特攻」を登場させるに至るのである。

しかし、本センター所蔵の紙芝居作品においては、本稿で紹介した《一死奉公》《一億の鉢巻》を脚本用語とする『我は何をなすべきか』1944.10.15、『神機いたる』1944.11.20など1944年後半に刊行された作品を最後に、このような政府の世論指導方針への応答性を示すものはもはや見当たらない。

次稿ではひきつづき、紙芝居脚本からの基礎データにもとづき、戦時下の〔国内社会〕—〔17/生産・食料・資源、18/交通・通信、メディア、19/教育、20/銃後生活、後援団体、21/動員・奉仕・生活改善、23/防諜、防空〕の姿を紹介していく予定である。

（続）

コラム

招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
蘭 曉敏	華東師範大学 対外外語学院 博士課程	2015年9月27日～2015年10月17日
Simonia Fukue Nakagawa	サンパウロ大学 日本文化研究所 修士課程	2015年11月2日～2015年11月22日
鄧 苗	北京師範大学 民俗学与文化人類学研究所 博士課程	2015年11月30日～2015年12月19日
謝 咏	浙江工商大学 東亜文化修士課程／日本文化研究所所長補佐	2015年12月6日～2015年12月25日
Marine PENICAUD	フランス東アジア文明研究センター研究員	2016年1月8日～2016年1月27日

もし川が枯れてしまったら、魚は棲息し続けられるのか？

—中日の伝統的な地方曲芸における生き残りの窮状について—

蘭 曉敏
(華東師範大学)



世界各国の優秀な伝統曲芸は、無形文化財を保護する背景の下で次第に注目を浴び、重視されるようになった。しかし、社会が発展し人々のライフスタイルが変化することにつれて、我々は無形文化財を保護するために、幾多の想像を超える困難と窮境に直面することは免れ得ない。

無形文化財は伝統的な文化であり、さらに民族文化の精髓と言っても過言ではなかろう。それを古来から脈々と流れる歴史の川に例えたとすれば、川に棲息する様々な種類の魚は、それぞれ独自の文化（伝統的な地方曲芸）を表すものと捉えることができる。視点を変えてみると、曲芸の範疇から見れば、一種類の魚は一種類の伝統的な地方曲芸を表せる。そしてそれらの伝統曲芸は長い期間を経て発展と変化を遂げてきた。自然環境と生態環境が変わった今の時代に、水が汚染されたり、川が枯れたり堰き止められたり、あるいは改造されたりした場合、そこに棲息する魚たちはいかなる運命をたどるのだろうか？

ある魚の群れが時代の流れに沿って、絶えず自身の形態を進化させることで社会の環境に適合した。したがって、新たな環境に成長し続け、脚光を浴びるようになったのである。その一方で、また別の魚の群が時代の発展と同調できず、都市化の過程で適応しなくなり、止むを得ず生存の危機に陥った。また、社会に受け入れられず、時代遅れになって消え去っていく魚の群もあった。この魚の理論は、今の伝統的な地方曲芸における生き残りの窮状を生々しく反映している。

中国は曲芸の大国である。様々な曲芸は各地域で広範囲に分布し、それぞれ悠久たる歴史を持っている。曲芸の種類がとても豊富な上に、大衆とのつながりが深く、芸術的な価値があると考えられる。残念なことに、数多くの地方曲芸はかつて人気を博したものの、今では、人々

の関心は薄れ始めている。筆者は実地調査を通して、中国初の「中国の曲芸名城」の山西省長治市にある伝統的な地方曲芸についても、様々な存続問題があることに気付いた。次に、中国の重要無形文化財目録に収録されている「襄垣鼓書」を例に挙げよう。

「襄垣鼓書」は明末清初山西省に発祥した、地方の曲芸の一つである。スケールは他の曲芸より比較的大きく三百年以上の歴史を有し、演じ手は主に盲人で、説唱の形式で



写真1 目の不自由な芸人が襄垣鼓書を演じる様子
(中国山西省長治市襄垣県非物質文化遺産体験館・2015/08/19撮影)



写真2 襄垣鼓書を見に来た観衆たち
(中国山西省長治市襄垣県大黒溝・2015/08/19撮影)



行われる。それは、目の不自由な芸人が一人で楽器を演奏しながら歌うことになっている。特に一人で七種類の楽器を演奏することは、鋭気があり、非常に際立っている⁽¹⁾。

残念なことに、このような独特な風格を帯びる伝統的な地方曲芸を演じる芸人の数は今では三十人以下になってしまった。そのうえ弟子を募集しても誰も学びに来ないということが、「裏垣鼓書」の伝承における最大の問題である。また、観客層をみてもやはり年寄りの方が多い。

この状況は中国だけでなく、日本の伝統曲芸調査にも同じことが言える。筆者は日本滞在中、横浜三溪園の琵琶演奏会に行った。また、東京の国立能楽堂、浅草演芸ホールなどの伝統曲芸を上演する場所で実地調査を行った。気付いたことはまず観客の人数が少ないこと。また、観客層は年配者が多いことである。それらのことから伝統的な曲芸は若い人たちにそれほど受け入れられなくなったことが分かった。

中国であれ日本であれ、伝統的な曲芸における発展の見込みはいずれも楽観視できない状況になっている。伝承者の高齢化や、後継者不足の問題はとても深刻で、さらには曲芸の大衆的受容も希薄になってしまった。これら



写真3 浅草演芸ホールで上演した日本の伝統的な曲芸
(東京の浅草演芸ホール・2015/10/04撮影)

の問題を解決しない限り、かつて我々の生活に深い影響を与えた貴重な無形文化財はみるみるうちに消えてしまう運命にあるだろう。問題の解決は決して容易ではないが、高齢化、都市化の問題を抱えた今、「一刻を争う事態」と認識し、無形文化財の保護に早急に取り組むことが必要であると、筆者は考えている。

[注]

(1) 王 徳昌『裏垣鼓書精品匯集』、政協襄垣県委員文史委、襄垣県文化服務中心編印、序。

日本の文化、現代美術、マンガ探究



Simonia Fukue Nakagawa
(ブラジル サンパウロ大学 日本文化研究所)

この調査は、非文字資料研究センターの訪問研究員制度により、日本の美的価値観といえる「カワイイ」と「バサラ」の関係を、日本の現代美術家の奈良美智と村上隆の二人の作品から導き出したものである。



写真1 村上隆 個展「円相」、Kaikai Kiki Galleryにて
撮影：シモニア・フクエ

私は以前、2004年から2005年の間日本に住んでいたことがあったが、その頃と比べると、観光地や公共交通機関の案内にローマ字や英語の説明が加えられるなど大きく

変化していることに気付いた。そのことは単に日本が変わったというだけでなく、グローバル化によって、インターネットでの情報アクセスが容易になり、より多くの世界の人々が日本のポップカルチャー、特にアニメやマンガの虜になり始めたためと説明することができる。まさしくこれは、私が研究者として日本に戻ってきた理由の



写真2

Blum & Poe Tokyoギャラリーでは奈良美智の作品を撮影することはできなかった。その後研究の合間に奈良美智が手掛けたカフェに立ち寄ったが、私の知っている作品は撤去されたり作者の元に返されたりしてしまっていた。

一つでもある。

21日間で行う研究の内容は前もって明確に決めていた。「カワイイ」と「バサラ」について、現代美術家の村上隆と奈良美智について、マンガについて (将

来の調査のため)、の三つである。

滞在一日目、私は大学に行き非文字資料研究センターのスタッフの方々への挨拶を済ませ、宿泊先のチェックインを行った。その後私は、指導教授でありコミックの歴史に詳しいステファン・ブッヘンベルグ教授に会い、私が感じている疑問に答えていただくなど多くのことを説明してもらい、日本のコミックだけでなく、文化についても調査するとよいと指導してもらった。

その日はそのまま非文字資料研究センターに残り、「カワイイ」と「バサラ」の研究を行った。その作業はこれら二つの美的価値観を、通りやお店、ショーケース、そして日本全体の社会のなかで見つける準備段階として、より理解を深めるために重要なものであった。

「かわいい」の元の形は「かほはゆし」であり、それが「かわゆし」に短縮され、口語で「かわゆい」となり、第二次世界大戦後頃までに最終的に「かわいい」になったことが、これらの研究のなかで分かった。その意味は「哀れみの感情」「深い同情」「もろさ」などを意味するが、主には「かわいい人」「優美な」「壊れやすい」といった意味で使われる。しかし別の種類の「かわいい」もあり、それは「キモかわいい」というもので、「気持ちが悪いもの、不快に思うもの」と「かわいいもの、繊細なもの」が合わさったものである。



写真3 「カワイイ」 in 原宿
撮影：シモニア・フクエ

原宿には二回行ったが、残念ながらロリータファッションの少女たちを見つけインタビューすることはできなかった。

ロリータファッションに見られるこの美的価値観は村上隆や奈良美智の作品に表現されており、時には可愛げのあるキャラクター、時にはグロテスクなモンスターたち、そして反抗的な子どもたちなどに表現されている。

バサラについての美的価値観に関してそれまでは、きわめて少ない理論的な知識しか持ち合わせていなかった。それは私の研究成果の目標が十分に達成されていなかったからである。この研究に対して最も完成された作品を出したのが芸術家の天明屋尚である。彼は2010年に「BASARA展」を開催した。私はこの研究の知識を増やすためにミヅマアートギャラリーを訪れたが、そこで見つけた情報はすでに私が得ているものであった。

奈良美智と村上隆の二人の関連性を調べるにあたり、Blum & Poe Tokyo ギャラリーのディレクターの久保玲奈さんと横浜美術館の学芸員の内山淳子さんにはこれら二人の美術様式について非常に丁寧に説明していただいた。奈良美智のアートは内観的な表現で、村上隆は商業的な要素を含んでいるということだった。

私は今後の研究のため、チューターの高森美憂さんに同行してもらい、国際的なマンガイベントに足を運んだ。同人誌というものは、ヨーロッパの影響と、日本の伝統的なマンガの生き生きとした構図によって作られたのではないかと私はそこで気付いた。これは明治大学の「米沢嘉博記念図書館 まんがとサブカルチャー」の教授、斎藤宣彦氏さんとマンガ研究者の野田謙介さんと親切な通訳と説明をしてくれた佐々木みつ希さんによって、ある程度立証された。

今回の私の研究結果として、「バサラ」と「かわいい」という美的価値観は、奈良美智と村上隆の作品だけでなく、日本社会と文化全体に影響していることが分かった。



写真4 海外マンガフェスタで購入した同人誌
撮影：シモニア・フクエ

民俗と生活 —日本訪問時の見聞と感想—

鄧 苗
(北京師範大学民俗学与文化人類学研究所)



日本での訪問期間中、日本の民俗文化を調査し、初

歩的な研究を試みた。また、日常生活を通して日本の



文化とライフスタイルも体験できた。

日本で最初に訪れたのは埼玉県の秩父市である。私はチューターとともに秩父の民俗祭礼である秩父夜祭について、二日間にわたって調査を行った。具体的な内容は別の報告書を作成したため、ここでは触れないことにする。



写真1 国立歴史民俗博物館の入口

二番目に訪れたのは千葉県にある国立歴史民俗博物館である。国立歴史民俗博物館は日本最大の博物館といわれ、非常に広い。博物館の立派な建物の外、周りの自然風景もとても秀麗だ。見学の時、博物館教授の松尾恒一先生がわざわざ館内の案内と解説をしてくれた。特に民俗関係の第4展示室にある展示物はとても豊富で、古代から現代まですべて網羅している。実物の展示以外に、映像を流しながら紹介するものもある。人々は見学のついでに古い民俗音楽も耳にすることができ、楽しい見学に陶酔する。



写真2 宝秀寺の近くにある墓地の一角

三番目に行ったのは私が泊まった横浜白楽寮の近くにある六角橋宝秀寺の共同墓地である。墓地は全体的に静かで穏やかな雰囲気が感じられる。中国の都市にも共同墓地があるが、私は実際に行ったことがないため、どんな様子かはわからない。ただ、ここで断言で

きるのは、中国の墓地はほとんど寺院の近くに設置しないことと、墓地に仏像を置かないことである。

次に述べたいのは、人々の生活習慣及び地元横浜の町の風景である。私が注目したところがいくつかある。一つはゴミの分別について。日本ではゴミの分別を推進しているため、町中どこもきれいに保たれている。最も印象に残ったのは、秩父夜祭を調査した時、あれほど大勢の観光客がいたのに、地面などはあまり汚れていないことである。中国の廟会（日本でいう縁日）など祭に似た場面なら、現場はきっとゴミだらけになるだろう。もう一つは日本人の礼儀正しいところである。コンビニエンスストアにせよレストランにせよ、また他のところでも、会った時や別れる時に人々は互いにお辞儀をしよう。日本民族はこのやり方をもって礼儀の真髄を日常生活に滲ませる。最後の一つは地元横浜の風景である。ここは繁華街であり、商業的な景色が素晴らしい。店舗の装飾は人々に心地よさを感じさせる。六角橋にある数軒の中華レストランも中国の風情が感じられる。



写真3 泉岳寺での儀式

最後に見学したのは東京にある泉岳寺である。私はチューターとここで義士祭を見学した。義士祭は毎年12月14日に行われ、13日には前夜祭もある。14日の本祭を見に来る観光客が非常に多い。この日の目玉は義士墓前供養である。仏教僧侶の衣装を着ているお坊さん達が墓前で読経する。この他に、たくさんの人が寺の敷地内にある墓地に行ってお参りし、墓碑を洗っていることに気付いた。おそらくこの大切な日に、これらの人々は亡くなった親族への恋しい思いに誘われるのだろう。

短い二十日間で日本文化との接触は本当に限られたものであったが、秩父夜祭をはじめたくさんの事柄に非常

に興味を湧いた。今回の旅はさらに深く掘り下げて研究する機会・時間がなかったけれども、日本文化の種はず

でに私の心の中で根を下ろして芽吹いたと確信している。次回の日本への旅を大変楽しみにしている。

日本における「筆談」に関する調査



謝咏
(浙江工商大学東亜研究院)

2015年12月6日ー25日、神奈川大学非文字資料研究センターからの招へいで、若手研究員として横浜へ向かい、20日間の研究調査を行った。指導教授の小熊先生及び事務室の成田さんを始めとする関係者の皆様から多大な支援をいただき、円満かつ充実した調査ができた。20日間で主に「筆談」に関する調査を行った。非文字資料研究センターの研究室と神奈川大学図書館では、学内のデータベースを通して論文検索を行い、論文と書籍に目を通した。国会図書館と東京都立中央図書館では資料収集などを進めた。



写真1 小熊教授の案内で常民文化研究所を訪問した

東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、言語や民族そして文化の障壁を超越して共有される漢字漢文の筆談は中日間のみならず、朝鮮半島や近世の琉球及びベトナムでも同様にみられる。したがって、千年を越える東アジア地域

の交流のなかには、多くの筆談文献が今なお残されているのである。

しかし中国国内では、資料に限りもあり、また筆談はあくまでも文化を超える交流で、相手国の資料に関する調査が必要になったため、今回の機会を利用して、下記のとおり行った。

1. 王勇教授率いる研究グループに参加

週に一回「筆談研究会」で原資料を輪読しているうち、

ある事実に気がついた。それは、音声がないため、文字による意思表示が不十分な場合、当事者は往々にして筆談用の紙に図形を書くということだった。

たとえば、日朝間の筆談記録『朝鮮漂流日記』には、7巻の原稿に、81点の彩色挿絵が描かれている。それは地理や方角などをあらわすための地図や地形図のみならず、港口・船舶・人物・衣冠・器具・文房具・武器など多岐にわたっている。地図、地形図、港口(28枚)、船舶(5枚)、人物と衣冠(14枚)、農具、文房具、武器等(19枚)、天候(6枚)、食事(5枚)、その他(処罰、行列)(4枚)なども描かれている。

文章内容の理解を助けるために挿し入れた絵はコミュニケーションの役割も果たしているが、主な原因としては漢文に熟練していない著者の安田氏は、自分が得意な絵を使い、朝鮮の地方官僚からの度重なる検問に対して解釈を行い、徐々にお互いの理解を得て、また漢文のレベルの向上に伴い、徐々に筆談が展開するようになっていった。その後、対馬の倭館へ向かう途中も、地方官僚や船頭さんに尋ねながら、所在地の確認もでき、路線図もかなりの部分を作成することができた。筆談の文字部分が忠実に原稿にあらわされ、自分が得意な絵(スケッチ?)に丁寧に色彩をつけ、編集を行ったのだと推測した。今後とも視覚による筆談交流は東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、ただ単なる意思疎通以外に、東アジアの文人の精神世界をいかに動かすか、場合によっては、文字以外、絵なども重要な役割を果たしたと認識すべきだと思っている。

2. 「千歳丸」の乗員である名倉松窓に関する資料収集

幕末最初の訪中団である「千歳丸」の乗員の紀行文を数多く解読してきた。中でも、「千歳丸」の一員である名倉松窓に関する研究は中国ではほとんど扱われてこなかった。彼はメモ魔と称されるほどの膨大な筆談資料を残し、その筆談を通して、清国の官僚、商人、文人と幅広く人脈をもち、李鴻章からも好評を得て、「中日修好



条規」に大きく貢献した人物である。今回も神奈川大学図書館、国立国会図書館、東京都立中央図書館で、関係論文 26 点、関係資料 13 点を集めた。帰国後、手元の資料と合わせながら研究を進めたいと考えている。



写真 2 資料豊富な国会図書館

滞在期間は瞬く間に過ぎ去って、まだまだ探したい資料も沢山あり、3 週間では物足りない気がした。研究と資料調査以外の時間は、神奈川大学のキャンパスをまわったりした。常民文化研究所、非文字資料研究センターの規模と、整備された資料に感服した。90 年以上の歴

史を誇り、日本国内のみならず世界の民俗研究のトップの位置を占める機関で研究のチャンスを得、本当に幸運であった。今回は暖冬に恵まれ、温かい日も続き、横浜から東京へ向かう途中、白い富士山も見えた。また小熊教授から時折の鰻料理もご馳走になり、誠に充実した 20 日間だった。最後に小熊教授を始めとする非文字資料研究センターの先生方、及び成田紅音さんを始めとする事務室の方々に再度感謝の意を申し上げる。



写真 3 毎日白楽寮から神奈川大学まで通った道

日本における初期の口演童話についての研究報告

Marine PENICAUD
(フランス国立科学研究所 (CNRS) フランス東アジア文明研究センター)



非文字資料研究センターと、私が所属するフランス東アジア文明研究センター (CRCAO) (フランス国立科学研究所 (CNRS) のメンバー) との 2015 年度短期交換プログラムにおいて、2016 年 1 月 8 日から 1 月 27 日まで大学院研究者研究職として非文字資料研究センターに派遣されました。私を受け入れてくださったことに大変感謝しております。

私の研究内容は巖谷小波の生涯 (1870—1933) と、1920—1930 年代における口演童話 (子供に物語を話すこと) の写真や音声資料の調査を通して、口演童話の初期段階を分析することでした。

巖谷小波は近代日本児童文学のパイオニアであり、1895 年には子どものための読み物としてお伽噺という言葉を作りました。出版社の博文館で数え切れないほどのお伽噺を書いた後、彼は 1897 年に学校や公の場で、「読み物」を「聞く物」へと観客に適應させながら、子供たちのための語り部として、彼自身が作ったお伽噺を語り始めたのです。1908 年以降、彼は日本国内のみならず、日本の領土であった満州や韓国 (1913 年)、台

湾 (1916 年)、ハワイ (1926 年)、サハリン (1929 年) へと、講演と口演童話の会のために巡業して回ったのです。1917 年から彼が亡くなる 1933 年まで、博文館の多くの子ども向け雑誌の編集長の仕事と引き換えに、彼は年の半分を上演活動に費やしました。巖谷小波は、その回のテーマに合った俳句、またはことわざを自分自身で掛け軸 (掛け物) に書いて各上演に組み入れていたのです。

彼が活動している口演童話の写真には老若男女問わず、多くの観客が映し出されています。すなわち、彼の人気は子どもたちからだけではなかったのです。上演は屋内でも屋外でも肉声で行われていました。

今回の滞在期間中、私は日本の子どもたちの文化的歴史の一翼を担う巖谷小波の、口演童話に関連する資料の調査を望んでいました。また、彼の口演活動の場所や日にちに関する情報収集その他、写真や録音した音声記録を可能な限り参照したいとも考えていました。

今回の目的は、非文字資料研究センター、日本常民文化研究所を含む神奈川大学図書館で情報を収集すること

でした。また、巖谷小波と彼に関わる作品の多くを収蔵する白百合女子大学児童文化研究センターや、東京・千代田区にある公益財団法人日本青少年文化センター、そして大阪では一般財団法人大阪国際児童文学振興財団(IICLO)等々を訪れることも目的の一つでした。さらに私は巖谷小波の孫息子であり、明治学院大学の名誉教授でもある巖谷國士先生にお会いすることも予定していました。先生は、2012年に財団法人日本青少年文化センターに私の研究を紹介して下さった方であり、ポストカードや写真を含む巖谷小波の家族関連資料の管理者でもあります。

私が非文字資料研究センターに来る少し前、若者のための日本文化財団のサポートを伴った、大分県の玖珠町久留島武彦研究所を、メールで所長の金成妍(キム・ソンヨン)さんに紹介していただきました。長年、口演童話活動において小波のパートナーであった久留島武彦についての情報を集めるべく同研究所を訪れるつもりでしたが、あいにく金さんが健康上の理由から私の訪問を受け入れられなくなり、訪問は中止となりました。

さらに連絡と時間の不足が理由で、IICLOへの訪問も実現できませんでした。

若者のための日本文化財団は口演童話に関する研究資料を収蔵していないため、訪問する必要性は感じられませんでした。

滞在中の6日間は神奈川大学図書館で資料を集め(主に非文字資料研究センターと日本常民文化研究所)、2日間は東京の国際子ども図書館で資料を集めました。口演童話の歴史に関する資料があまりにも少ないことに私は驚きました。フランスでも日本の児童文学と文化に関する資料は十分でないこともあり、小波のいた時代とそれ以降の文化的背景における彼のキャリアを分析するために、結局のところ研究範囲を日本の児童文学と文化の歴史にまで広げることになりました。

神奈川大学外国語学部の村井まや子先生との対談は、お伽噺と芸術の関係に対する私の研究の幅を広げる手助けとなりました。村井先生は親切にも私の研究報告発表会に出席していただきました。

私は巖谷國士先生に連絡を取ってはみたもののお忙しいようで、私の滞在期間中は東京近郊にいらっしやらなかったため、先生のもとを訪ねることは叶いませんでした。それでも先生は、ご自身で監修し資料を収集した、埼玉県立近代美術館での展覧会「旅と芸術」を私に紹介していただきました。展覧会には口演童話上演巡業中の巖谷小波のポストカードが飾られていました。児童文化

研究センターを訪問し、小波日記研究会の猪狩友一先生とお会いした後、大学講師であり巖谷小波作品の専門家である中川理恵子先生と一緒にその展覧会に赴きました。猪狩先生は親切にも2000年3月から小波日記研究会の提供する出版物(その団体が刊行する「巖谷小波日記翻刻と注釈」)のコピーを私にくださいました。前回の2012年の訪問時から巖谷小波研究に向けた重要な資料として出版物のコレクションを、親切にも送っていただけていました。

東京・千代田区神保町の古本屋と本屋では2日間かけて望んでいた資料を探しました。そこで、個人的なコレクションを全巻揃えるために必要な小波お伽全集⁽¹⁾の原文書物のコピーを含んだもの、日本中の口演童話活動の情報が記されており、巖谷小波のキャリアも含まれている、内山憲尚の「日本口演童話史」⁽²⁾、そして児童文学の歴史に関わる他の作品(関係する伝記が見て取れる資料)を買うことができました。

大学キャンパス内での施設利用を可能にするなど、短期交換プログラムの隅々まで私を手助けして下さった非文字資料研究センターのスタッフの方々に大変感謝しております。彼らの協力が私の滞在を大変有意義なものにし、そのおかげで実りある研究成果を上げることができました。国際寮では素晴らしいスタッフが協力的な対応をしてくださりととても快適でした。チューターの八角香さんとアドバイザーの熊谷謙介先生が忙しいことは予め理解していましたが(1月が大学の期末試験期間であることは後で知りました)、研究の準備や1月26日の研究報告発表会、そして日本語でのメールの書き方等々で強力にサポートしていただき、大変お世話になりました。彼らなくして研究を成し遂げることはできなかったと思います。改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

〔注〕

(1) 巖谷小波、小波お伽全集 第九巻 少年短編、1930

(2) 内山憲尚、日本口演童話史、文化書房博文社、1972



コラム 派遣研究員レポート

名前	所属	派遣期間
王 子成	華東師範大学中国非物質文化遺産研究中心	2015年12月1日～2015年12月17日
平田 茉莉子	ブリティッシュコロンビア大学アジア学科	2016年2月2日～2016年2月21日
王 鶴	フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター	2016年4月21日～2016年5月11日

華東師範大学中国非物質文化遺産保護研究中心での訪問研究



王 子成
(外国語学部中国言語文化専攻 博士後期課程)

2015年12月1日からの17日間、私は神奈川大学非文字資料研究センターの若手派遣研究員として、中国の華東師範大学非物質文化遺産保護研究中心を訪問し、上海、杭州及び衢州の媽祖信仰について調査を行った。

通俗文学研究を専門とする筆者にとって、古典小説の中に描かれた地方神信仰の社会的・文化的側面を研究することによって、民間信仰と文学の繋がりについて探りたい。

なぜ上海、杭州及び衢州的いわゆる江浙地域に調査地を定めたかという点、媽祖信仰は古典小説に頻繁に見られる江南地域の水神物語とどのような関係があるのかを知るためと、文学作品における媽祖の人物像の形成過程を研究するためである。

12月1日に、今回の訪問先の華東師範大学に到着し、中国民俗学研究の重鎮である陳勤建先生のご指導を賜った。

翌日、華東師範大学博士後期課程に在籍する蘭曉敏さんに同行していただき、上海、杭州及び衢州的媽祖信仰について調査を始めた。

上海での最初の調査は、松江の方塔園にある浦江媽祖廟であった。2日から4日にかけて、上海市内の郷土神廟、水神廟を調査した。豫園に隣接する城隍廟の中には、上海の郷土神である城隍神はもちろんのこと、道教の神々も祀られている。興味深いことは、廟の管理者である道士たちが道教の慈航真人に媽祖を習合し、祭祀することである。最後に市内の昆明路73号提籃橋地区にある下海廟を訪ねた。かつての提籃橋地区は海の入江になっており、水運と交通の要衝であった。そこに水神廟が建てられ、航海の守護神たちが祭祀されていた。今の下海廟には、仏教の神々と共に媽祖が分霊祭祀されている。

このように、媽祖信仰には単なる水神信仰だけでなく、仏教、道教の様々な神格と習合が見られる。こうした神

仏習合は、文学作品にも反映された。例えば、明の呉還初が著作した『天妃出身濟世傳』における媽祖の人物像には、正に仏教、道教、儒教のいわゆる三教合一の特性が備わっている。

今回の現地調査を通して、民間信仰が文学における媽祖の形成に与える影響を再認識することとなった。

また、上海に滞在している間、華東師範大学図書館、上海博物館を利用し、資料の調査と見学を行った。

つづいて、5日から11日にかけて、杭州、金華、衢州的媽祖信仰について調査を行った。杭州博物館、図書館を利用したのち、文献資料と杭州の地方誌に基づいて、呉山、古武林門周辺、孩児巷をまわって調査をした。残念なことに、媽祖廟は既に現存しない。だが、呉山で昔盛んだった媽祖信仰は今では観音信仰に形を変えている。その理由は、今の時代では海上貿易におけるリスクが減ったと推測され、媽祖が必要とされなくなり、その代替



写真1 方塔園にある浦江媽祖廟



写真2 上海下海廟

として観音信仰が盛んになったと考えられよう。

杭州の次は、金華に赴いた。金華市博物館で見学をしてから、金華市図書館に行き、資料を調べた。金華での最大の収穫といえば、やはり良渚文化の出土品を自らの目で見て、



写真3 杭州の古武林門跡地

直に解説を聞くことで、稲作文化の歴史について理解を深め、稲作文化と水神の繋がりを歴史の実物を通して実感できたことであった⁽¹⁾。



写真4 呉山の観音信仰

金華の次は、衢州を訪れた。衢州は文字通り、四通八達している。町の南は福建の南平と隣



写真5 杭州孩児巷

接し、水路を通して、煬帝の時に開削された大運河と繋がっている。そのため、衢州は交通の要衝として発達し、貿易が盛んであった。私は『衢州府誌』、『衢県誌』の記載に従って、天皇巷の媽祖廟を調査した。媽祖廟は市の中心地域にあることから、媽祖信仰が繁栄していた往時

の面影を今でもしのぶことができる。

12日に上海に戻って調査資料をまとめ、



「調査成果 写真6 金華市博物館の稲作における展示

報告会」の準備をした。その間、華東師範大学の先生の勧めで、上海で開催された敦煌文化展覧会を見学した。15日に華東師範大学で報告をし、2日後に神奈川大学に戻った。



写真7 天皇巷の入り口

今回の訪問調査は陳勤建先生と蘭曉敏さんのおかげ

で、研究成果が大いに実った。陳先生のご指導及び蘭さんの親切な支援に心から感謝し、これからも研究に邁進していきたい。



写真8 天皇巷天妃宮

〔注〕

(1) 鈴木陽一「白蛇伝」の解説—都市と小説 / 神奈川大学人文研究所所報(23)、p15-36 に稲作文化と水神について論述があった。

バンクーバーにおける収蔵資料等の保存・修復について

平田 茉莉子
(歴史民俗資料学研究所)



海外には、多くの日本コレクションを所蔵している博

物館・美術館が存在している。それらの博物館・美術館



ではどのような方法で所蔵資料を保存・修復しているのか、また海外にも表具師・経師のような古来より文化財保存技術の一翼をになう職人が存在するのかを調査するために、海外への派遣を希望した。

2016年2月2日～2月21日までの約3週間、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学(The University of British Columbia, UBC)のアジア学科に滞在した。今回はUBC図書館、UBC人類学博物館(UBC Museum of Anthropology, MOA)、バンクーバー博物館(Museum of Vancouver, MOV)、日系博物館・文化センター(Nikkei national museum & cultural centre)、州立ロイヤル博物館(Royal British Columbia Museum)、ピクトリア・アート・ギャラリー(The Art Gallery of Greater Victoria)の6館を中心に調査を行った。各館での保存修復担当者・日本コレクション担当者に、保存修復の方法や使用する素材、日本コレクションの扱い等についてのインタビューと施設見学を行った。



写真1 MOAの修復室

私が今回の調査で驚いた点が二つある。まず1点目は、バンクーバーでは州立・私立に関係なく、館毎での保存修復関係者同士が連絡を密に取り合う協力体制が出来ていることである。常に保存修復関係の最新の研究情報を共有し、修理方針を決める会議やワークショップ等を行っていた。その理由として考えられるのは、カナダのクイーンズ大学にコンサベーション課程があり、そこの出身者が多く活躍していることが非常に大きいと思う。日本では学会などはあるが、各修復室や工房によって独自のやり方などがあり、すべてを共有することはあまりないといえる。ましてや所属が違うと尚更である。日本でも、関係者同士がこれまで以上に密なコミュニティをつくることできれば、保存修復の技術はより発展するのではないかと考えられる。

2点目は修理の素材として、日本の和紙が多用されていることである。以前より海外の修復現場で和紙が使用されているという情報は耳にしていたが、その使用方法の多様さに驚いた。私は和紙・洋紙共に紙素材の資料の修復に和紙が使用されていると予測していたが、実際に

は日本コレクション等の紙素材の資料だけでなく、カゴや仮面など木の素材の資料の修復



写真2 修復室で使用している和紙のサンプル

にも和紙を使用していることが分かった。また、紙素材の資料を展示する際には、マップボードに生麩糊で直接貼り付けていた。日本産の素材は安全だという一種の信仰のような考え方には少し疑問を感じるころでもあるが、近年ユネスコの無形文化遺産に登録された理由も納得できる。

ところで、バンクーバーでは表具師・経師のような古来より文化財保存技術の一翼をになう職人の存在を確認することは出来なかった。その理由として、バンクーバーの歴史は新しいということが考えられる。州立博物館の展示を見ても感じたことであるが、開拓以前は非文字文化の原住民の歴史ということでひとくりにされていた。各館の担当者に聞いてみてもバンクーバーに関する資料は新しいものが多いから、今まで修理の必要性がなかったとの回答が返ってきた。他国のコレクションに関して修理の必要がある場合は、各国の保存修理機関に協力を仰ぐことも多いそうである。

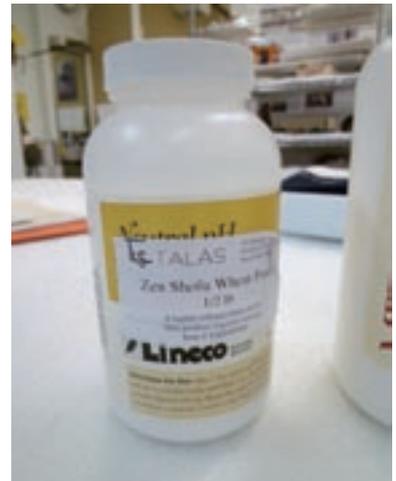


写真3 修復室で使用している生麩糊

今回の調査日程がブリティッシュコロンビア大学のリーディングブレイク期間(一週間ほどの短い春休み)と重なっていたにもかかわらず、アジア学科の許南麟先生は快く受け入れてくださった。またチューターのXiaoyiさん、その他アジア学科の皆様、各館の担当者の皆様、ホームステイ先のホストファミリー、神奈川大学非文字資料研究センターの皆様がたくさん助けていただき、非常に有意義な調査が出来た。お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター訪問記

王 鶴

(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



私の博士論文のテーマは、近代の日本海軍軍政史及び日清海戦史である。中日両国の近代海軍の発展は、1860年代からほぼ同時に始まった。この時代には、英仏など列強の極東への拡張活動は中日の海軍建設に大きい影響を与える。特に1860～1890年代には、フランスが重要な役割を演じる。その時期の中日の海軍史研究にとって、フランスの影響は少なからずあると思う

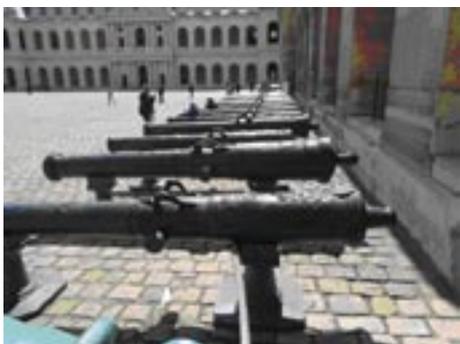


写真1 オテル・デ・ザンヴァリッド広場に並んでいる中世、近世の青銅砲

が、いまの中国史学界や、日本史学界は、フランス側の史料の利用は依然として十分ではないと考える。日仏、中仏の海軍技術提携に関する研究を進めるためには、フランス史料の利用は必要不可欠なことだと思う。

この問題を抱えながら博士論文を進めるために、2016年4月21日～5月10日の21日間、私は神奈川大学非文字資料研究センターの若手研究者として、フランス国立高等研究院の東アジア文明研究センターを訪問し、3週間の調査、学術交流の活動を行った。今回の主な調査活動はフランス外務省、海軍省資料館所蔵の史料の状況を探ること。その他、パリ市、ブレスト市のフ



写真2 近代フランス軍港を示す油絵 (シャイヨにフランス国立航海博物館)

ランス国立の海洋、海軍博物館を見学することである。

4月21日、フランス時間午後6時に、私はシャルルド・ゴール空港から、RER Bという市内電車に乗り、

80分かけて、自分の宿泊先のある、有名な国際大学都市 (Cité universitaire de Paris) に到着した。翌日、計画に従い、今回の活動は派遣機関を訪問することから始まった。東アジア文明研究センターは、フランス屈指の極東の歴史と文化を専門に研究する学院であり、



写真4 19世紀のフランス海軍の全金属潜水服 (シャイヨにフランス国立航海博物館)

附属の図書館には中国、日本、インドの言葉、歴史、民俗、文化に関する膨大な資料を蔵する。フランスの連

休の影響で、その日は図書館の登録手続を申請するだけで終わってしまった。

5月2日には、院長の Nicolas FIEVE 先生にお会いした。先生は、日仏軍事交流史の研究に関する著書をくださった。その前に、資料調査が順調に進むようにと、東アジア文明研究センターを通じて、FIEVE 先生から訪問予定の資料館にあてる紹介状もくださった。東アジア文明研究センターが2名のチューター、博士課程の留学生であるイギリス人のアリスさんと中国人の鐘量さんを派遣してくださり、フランスでの生活と調査活動をサポートしていただいた。



写真3 船のフィギュアヘッド (シャイヨにフランス国立航海博物館)

以上の協力をいただき、調査活動が順調に展開した。

文字資料を探す仕事が5月1日から始まった。最初の目的地はパリ市内のヴァンセンヌ (Vincennes) に



あるフランス国防省海軍歴史資料部である。計画にのっ
とって、今回申請した複写の資料とその目次番号は以下：

- 1、BB4 1382 『フランス駐清国大使館の武官より、福
州船政局に関する報告』
- 2、BB4 1555 17/5/2 『福州船政のフランス人雇用者
との契約書』
- 3、BB4 1555 17/5/5 フランス技術大監の雇用契約書
- 4、BB4 1555 17/5/54 福州船政局についての機密日記
- 5、BB4 1555 17 福州についてのファイル、フランス
人雇員とフランス艦隊及び海軍省の間の往復通信
- 6、CC7 1020 お雇いフランス人技師、Giguelの人事
書類
- 7、CC7 1850 お雇いフランス人技師、d' Aigwebelle
の人事書類
- 8、CC7 2728 お雇いフランス人技師、De Segonzac
の人事書類

以上の諸
資料には、
横須賀製鉄
所、福州造
船廠の創建
経緯とフラ
ンス政府、
軍部の介入
の過程が詳
しく記録さ



写真5 プレスト駅に18世紀のプレスト軍港及び要塞を示す油絵

れており、今後の研究に必ず役立つものと考えられる。

文書資料だけではなく、海軍に関する写真、模型、
実物、油絵などの非文字資料の調査も今回の目的の一
つである。これら模型、文物及び芸術品は、海軍の歴史
を物語、造船技術の情報を示す、大切な資料だと思う。

パリのシャ
イヨ及び大
西洋沿岸の
軍港都市ブ
レストには、
フランス
で最も有名
な海軍



博物館が、
またセーヌ川のアレキサンダー3世橋の南岸にあるオ
テル・デ・ザンヴァリッド (L'hôtel des Invalides)
にも有名な軍事博物館がある。

前述の
博物館に、
大量の中
世、近現代
のフランス
海軍に関
する展示
品が並ん
でいた(油
絵、模型、



写真7 甲鉄艦時代の巡洋艦の模型 (プレスト海軍博物館)

船首像 (Figurehead) 等を含む)。中世以降のフラ
ンス海軍の植民地活動、海軍の歴史及び文化の姿をは
っきりと示している。館中の艦船模型は、各時期のフ
ランス軍艦の技術特徴を明確に表している。展示され
た美術品、模型、木彫 (石彫も含む)、武器に接し、
フランス海軍の歴史と文化に対する認識と理解が、よ
り一層深
くなった。

今回の調
査研究では、
重要な研究
資料を数多
く収集した
だけではなく、
海外と
の交流とい



写真8 ヘリー黒船と同じ時代の蒸気外輪フリゲートの模型 (シャイヨにフランス国立航海博物館)

う貴重な経験が得られ、ところどころ異国文化を感じる
ことができ、実に愉快的な研究体験であった。最後になる
が、フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター
の方々のご助力により、順調な調査ができ、研究準備と
渡航等の手続きにおいては、森先生、内田先生、事務室
の成田さんから、様々なご指導と援助をいただき、心か
ら感謝の意を申し上げます。

2016年度 センター研究員・研究協力者

2016年4月1日現在

センター研究員

名前	所属部局	職名	研究班
内田 青蔵 (センター長)	工学研究科建築学専攻	教授	3
鳥越 輝昭 (副センター長・運営委員<国際交流担当>)	外国語学研究科欧米言語文化専攻	教授	2
孫 安石 (運営委員<研究会担当>)	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
小熊 誠 (運営委員<国際交流担当>)	歴史民俗資料学研究所	教授	4,9
熊谷 謙介 (事務局長/運営委員<研究事務総括・編集担当>)	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
大串 潤児	信州大学 人文学部	准教授	8
大里 浩秋	外国語学研究科中国言語文化専攻	名誉教授	3
川島 秀一	東北大学 災害科学国際研究所	教授	5
菊池 敏夫	外国語学部国際文化交流学科	特任教授	3
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	7
金 容範	非文字資料研究センター	客員研究員	3
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1
小松原 由理	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
駒走 昭二	外国語学部国際文化交流学科	准教授	9
昆 政明	外国語学部国際文化交流学科	特任教授	6
佐野 賢治	歴史民俗資料学研究所	教授	7
後田多 敦	外国語学部国際文化交流学科	准教授	4
ジョン・ボチャラリ	明治大学文学部	客員教授	1
菅 浩二	國學院大學神道文化学部	准教授	4
須崎 文代	非文字資料研究センター	客員研究員	3
鈴木 陽一	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	1
ステファン・ブッヘンベルゲル	外国語学部国際文化交流学科	教授	2
田上 繁	歴史民俗資料学研究所	教授	6
津田 良樹	工学部建築学科	助教	4
富澤 達三	松戸市立博物館	学芸員	8
中島 三千男	神奈川大学	名誉教授	4
中村みどり	外国語学研究科中国言語文化専攻	准教授	3
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	7
彭 国躍	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
前田 孝和	株式会社 神社新報社	取締役総務部長	4
宮田 純子	芝浦工業大学	助教	7
村井 寛志	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
森 武麿	神奈川大学	名誉教授	6,8
森住 哲也	工学研究科電気電子情報工学専攻	特別助教	7
森山 優	静岡県立大学国際関係学部 大学院国際関係学研究所	准教授	8
安田 常雄	歴史民俗資料学研究所	特任教授	6,8
安室 知	歴史民俗資料学研究所	教授	5
渡辺 美季	東京大学大学院総合文化研究科	准教授	9

研究協力者

新垣 夢乃	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	8
稲宮 康人	写真家		4
上原 兼善	岡山大学	名誉教授	9
金山 浩	非文字資料研究センター		4
金子 展也	株式会社アンカーネットワークサービス		4
何 彬	首都大学東京都市教養学部	教授	1
吉川 良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	3
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1
栗原 純	東京女子大学現代教養学部	特任教授	3
小島 摩文	鹿児島純心女子大学 国際人間学部	教授	9
小松 大介	沼津市歴史民俗資料館	臨時嘱託職員	7
小山 亮	公益財団法人 政治経済研究所	研究員	8
齋藤多喜夫	横浜外国人居留地研究会	会長	3
辻子 実	(元) 日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	(元) 委員長	4
鈴木 一史	小田原城天守閣	学芸員	8
鈴木 一弘	高知大学自然科学系理学部門	助教	7
徐 東千	韓国国立中央博物館	研究員	1
田島 奈都子	青梅市立美術館	主査 学芸員	3
陳 雲蓮	拓殖大学日本文化研究所	客員研究員 (非常勤)	3
常光 徹	国立歴史民俗博物館	名誉教授	5
得能 壽美	法政大学沖縄文化研究所	兼任所員	9



名 前	所属部局	職 名	研究班
富井 正憲	漢陽大学校建築大学建築学部	教授	3
中井 真木	早稲田大学国際学術院	助手	1
橋口 亘	南さつま市教育委員会 (坊津歴史資料センター 輝津館)	主任	9
原田 広	(元) 非文字資料研究センター	(元) 事務職員	8
本田 佳奈	一般財団法人 鹿島市民生涯学習・文化振興財団 鹿島市民図書館		4
松田 睦彦	国立歴史民俗博物館	准教授	5
松本 和樹	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	8
水町 史郎	東芝メディカルシステムズ(株)		4
山本 志乃	旅の文化研究所	研究主幹	5
李 利	非文字資料研究センター		1
レリソン・エドワール	フランス国立東洋言語文化大学	博士後期課程	4
若宮 幸一	旧古河鉱業若松ビル	館長	6
渡邊 奈津子	公益財団法人 大学基準協会	調査員	4

- 研究班： 1. 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究
 2. 19世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究
 3. 中国・朝鮮の旧日本租界
 4. 海外神社跡地のその後
 5. 汽水の生活環境史
 6. 船上生活者の実態とその変容に関する研究
 7. インターネット・エコミュージアムのためのデータマイニングとユーザインタフェース等の基盤技術に関する研究
 8. 戦時下日本の大衆メディア研究
 9. 日本近世生活絵引・南九州編

2016年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名(所属)
「野崎島民の離島によるかくれキリシタン信仰の変容」	小泉 優莉菜(歴史民俗資料学研究科博士後期課程)
「台湾民暦の普及・継続・大衆化(1914-1980s)」	游 舒 婷(歴史民俗資料学研究科博士後期課程)
「日本における社会関係資本と景観の関係性について」	関口 知誠(歴史民俗資料学研究科博士後期課程)
「近現代の歴史的公共建築の保存・活用に関する研究」	福士 陽子(工学研究科建築学専攻博士後期課程)
「女性に関する表彰から見る農村女性の地位の変遷」	馬 路(歴史民俗資料学研究科博士後期課程)

非文字資料研究センター 引越しのお知らせ

2016年4月、非文字資料研究センターは、21号館から28号館へ引っ越しました。スタッフ一同、引き続き、研究員の皆様の支援に努めて参る所存にございます。なお、電話番号、住所の変更はございません。



主な研究活動

運営委員会

2015年度

第9回 3月2日 2015年度事業報告書（案）について、2016年度事業計画書（案）について、2016年度研究担当者人事について、他

2016年度

第1回 4月27日 2015年度決算報告について、2016年度予算（配分）について、2016年度予算（配分）について、2016年度センター共同研究課題一覧について、2016年度センター研究員人事について、センター年間計画について、海外提携機関からの招聘研究員について、海外提携機関への派遣研究員について（派遣期間の変更）、フランスINALCO所属の若手研究者の受入れについて、第四期研究事業検討会の発足について、博物館構想・展示室整備（参考室）検討メンバーの選出について、他

第2回 5月25日 2016年度奨励研究審査について、2016年度招聘・派遣研究員について、他

第3回 6月22日 2016年度奨励研究採択者 2016年度予算書再提出について、他

研究員会議

2015年度

第5回 3月2日 2015年度事業報告書（案）について、2016年度事業計画書（案）について、2016年度研究担当者人事について、他

2016年度

第6回 4月27日 2015年度決算報告について、2016年度予算（配分）について、2016年センター共同研究課題一覧について、2016年度センター研究員人事について、センター年間計画について、海外提携機関からの招聘研究員について、海外提携機関への派遣研究員について（派遣期間の変更）、フランスINALCO所属の若手研究者の受入れについて、第四期研究事業検討会の発足について、博物館構想・展示室整備（参考室）検討メンバーの選出について、他

研究会

研究班

2016年度

19世紀前期ヨーロッパ生活絵引班 4月26日、6月28日

中国・朝鮮の旧日本租界 -現況調査と現地で発行された出版物の分析- 5月6日

戦時下日本の大衆メディア研究 3月25日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
船上生活の実態とその変容に関する研究班	5/11	横浜・野庭	田上繁・安田常雄・昆政明・森武麿・松本和樹
船上生活の実態とその変容に関する研究班	5/21	横浜 山下町	田上繁・安田常雄・昆政明・森武麿・松本和樹

編集後記

今号からタイトルが『非文字資料研究 ニュースレター』から『非文字資料研究センター ニュースレター』となりました。紀要論文集のタイトル変更に合わせて、センターから活動報告をお届けするという趣旨を強調するためにリニューアルしました。新しいタイトルロゴとともに今後ともよろしく願っています。冒頭では二つの公開研究会について報告させていただいています。研究会がめぐる押しのため、なかなかすぐに報告できないのが悩ましいところですが、出席した方にとっては内容を振り返り、出席できなかった方には概要に触れることができる絶好の機会だと考えています。また2015年度に招聘・派遣した研究者たちの訪問記を読めば、一つ一つの研究が育っていく様子が垣間見られるとともに、これからこのような学術交流を続けていくことの意義を強く感じると思います。非文字資料研究じたいも歴史を重ねる中で、研究班を超えた意見交換や交流の機会が必要になっているのではないのでしょうか。その土台として、ニュースレターを活用していただければ幸いです。(K.K)

表紙紹介

表紙の写真は、本号掲載の公開シンポジウムで李百浩氏によって紹介された旧南京神社跡地のドローンによる鳥瞰写真である。中央の瓦屋根風の建物が同神社の拝殿、幣殿の部分で現在は民間の建築会社の事務所として使われている。現中華人民共和国の統治下に入った地域で、旧社殿が残っている例は非常に少なく、さらにそれが一般に公開されている例は極めて少ない。それにしても、ドローンによる鳥瞰写真は文字史料や図面、あるいは普通の写真とは違った迫力を持っている。最近、台湾の蔡錦堂氏からも台湾で再建された旧クスクス社の鳥瞰写真を送ってきたが、わがセンターもこのドローンの利用については早急に検討する必要があるのでは。(M.N)

『非文字資料研究』（旧『年報 非文字資料研究』）への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003－2007年度）以来、わたしどもは、その目的を達成するために〈図像〉〈身体技法〉〈環境・景観〉のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりをもつ非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有している。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解説という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

2016年度より誌名を『年報 非文字資料研究』から『非文字資料研究』へと変更し、年2回の刊行となります。寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご覧ください、執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：前期 1月～3月 後期 7月～9月

原稿締め切り：前期 5月末 後期 11月末

※原稿ご提出後、査読があります。

エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。

年報執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。

エントリーシートの提出・お問い合わせ先：非文字資料研究センター

E-mail: himoji-info@kanagawa-u.ac.jp

ホームページ：<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

非文字資料研究センター News Letter No.36

発行日 2016年9月30日発行

編集・発行 神奈川県 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

